令　和　６　・　７　年　度　　荒　尾　市　教　育　委　員　会　指　定

令和７年度　熊本県教育委員会「くまもと GIGA スクールプロジェクト」指定

荒尾市立八幡小学校研究紀要

日々の授業及びプロジェクトの質的改善

～「身に付けさせたい資質・能力」の育成を図る教師の在り方を見つめて～

令和８年２月

荒尾市立八幡小学校

研究主題　日々の授業及びプロジェクトの質的改善
～　「身に付けさせたい資質・能力」の育成を図る教師の在り方を見つめて　～

荒尾市立八幡小学校

１　主題設定の理由

（１）今日的課題から

中央教育審議会（2022）は「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）」において、教師による探究的な学びの必要性を次のように提言している。

> 『主体的・対話的で深い学び』を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにも求められる命題である。つまり、教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる。
>
> （中略）
>
> これからの時代には、日本社会に根差したウェルビーイングについて考察しつつ、教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを、研修実施者及び教師自らがデザインしていくことが必要になる。

つまり、教師が自らの授業や指導と向き合い、「主体的・対話的で深い学び」の視点で不断に見直し、改善を図ることが不可欠であると考える。

（２）昨年度の研究の反省から

昨年度は、「日々の授業及びプロジェクトの質的改善～『めざす児童像』の具現化を図る教師の在り方を見つめて～」を主題に、校内研究を進めてきた。「何をするか」を揃えるのではなく、「何を目指すか」を共有し、全職員で一体となって取り組んできた。

また、仮説を立てて進める従来の仮説検証型から、個々の教師が苦手分野の克服や得意分野の深化を図る探求型へと、校内研究の在り方を大きく転換した。

その成果として、学校評価アンケートでは、保護者７項目、職員１０項目で令和５年度より平均点が上昇した。また、令和６年度の児童の結果では、過半数の項目で平均3.20 以上（４点満点）を記録し、「八幡小に通ってよかったと思うか」という質問に対する回答は、全項目の中で最も高い評価となった。

さらに、５月と１２月に実施した校内研修に関する職員アンケートを比較すると、全ての質問項目で肯定的な回答の割合が増加していた。また、校内研究を振り返る記述には、次のようなものがあった。

> ・日々の授業や校務分掌を通して、自分の仕事の仕方を見直すことができた。
>
> ・様々な教科の授業を見る機会が多く、学びが深まった。
>
> ・年１回の研究授業ではなく、３回の公開授業を通して授業改善を継続できた。

研究主任が一方的に方針を示すのではなく、「めざす児童像の具現化」に向けて、教師一人ひとりが今の自分に必要なことを考え、自己決定していく。そうすることで、教

師の主体性を引き出し、研究の成果が児童に還元されていることを実感できる１年となった。こうした記述からも、非日常の１回の研究授業で成果を測るのではなく、日常の実践に焦点を当てた校内研究への転換が成果として表れていることがわかった。

しかし、年度末に行った本年度の校内研究に関する振り返りでは、次のような課題も浮き彫りとなった。

- 学校評価アンケートの結果を研究成果の根拠としたが、数値は学校全体の教育活動の影響を受けたものであり、校内研究の成果と断定するには妥当性や信頼性に課題がある。
- 副題に「『めざす児童像』の具現化を図る教師の在り方を見つめて」と掲げたが、その具現化がどの程度達成されたかを検証するのは難しかった。
- 他の先生の実践を、自分の課題や授業改善に直接結びつけるところまでは至らなかった。

以上の課題を踏まえ、令和７年度の研究では、持続可能性を重視しつつ、昨年度に得られた成果にさらに磨きをかけていく。また、これらの課題改善を図ることで、研究の質を一層高めていきたいと考える。

２　研究主題の捉え方

（１）「日々の授業の質的改善」とは

個々の教師が「身に付けさせたい資質・能力」を基に、授業での理想と現実の児童の姿を比較し、自分の授業の問題点を明確にする。その問題点を解決するための方策を職員同士の対話で共有し、「My mission」として取り組むべき課題を設定する。課題克服に向けては、熊本大学大学院教育学研究科の前田康弘特任教授の考えを参考に、日々の授業で実践を積み重ね、力量を高めていくことである**【資料１】**。

【資料１　前田康弘先生が教員研修の文脈に当てはめたデイヴィッド・コルブの経験学習モデル】

（２）「プロジェクトの質的改善」とは

個々の教師が「身に付けさせたい資質・能力」の育成を目指し、校務分掌に基づく取組を「My project」として設定する。必要に応じてプロジェクトチーム内で情報共有や相談を行いながら、方法の工夫・改善を進めることである。

（３）「『身に付けさせたい資質・能力』の育成を図る」とは

昨年度の３月に、「めざす児童像」と児童の実態との隔たりを把握するため、児童会の各委員長・副委員長と研究主任でランチミーティングを行った。議題を「現在の児童の姿を見つめ直し、『めざす児童像』に近づくために伸ばすべき力とは何か」と設定し、自由に議論を行った。

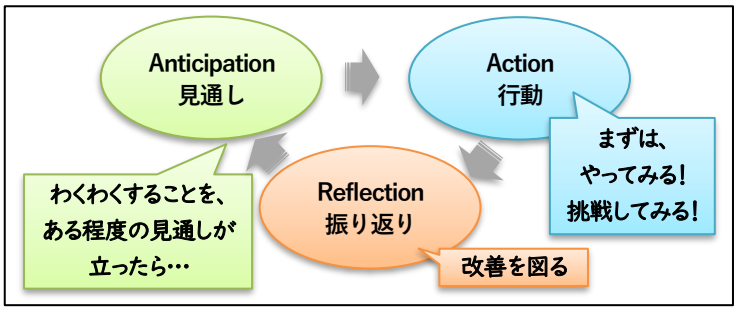
また、職員にも同様のアンケートを行い、その結果を分析・整理して学校長へ報告した。これらを踏まえ、学校長は令和７年度に育成すべき資質・能力を以下のように設定した。

【身に付けさせたい資質・能力】
主体性…自ら考え、進んで行動する。
協働性…他者を理解し、互いに認め合いながらともに高め合う。
自律性…自分に責任を持ち、最後まで粘り強くやり遂げる。

これら「身に付けさせたい資質・能力」の育成を目指して、「日々の授業の質的改善」及び「プロジェクトの質的改善」に取り組むことである。

（４）「教師の在り方」とは

教師一人ひとりが「身に付けさせたい資質・能力」の育成に向けて、OECD の Education2030 プロジェクトで提唱された学習プロセスである「AAR モデル」を活用し、日々の授業や校務分掌の取組を不断に見直し改善していくことを指す【資料２】。その過程で、自身の課題を克服したり、強みをさらに伸ばしたりしながら、教師としての資質・能力を高めていくことである。



【資料２　ＡＡＲモデル】

３　研究の内容及び方法

（１） 取組１「My mission（質的改善を図るべき授業の課題）」の達成に向けて

ア　内容

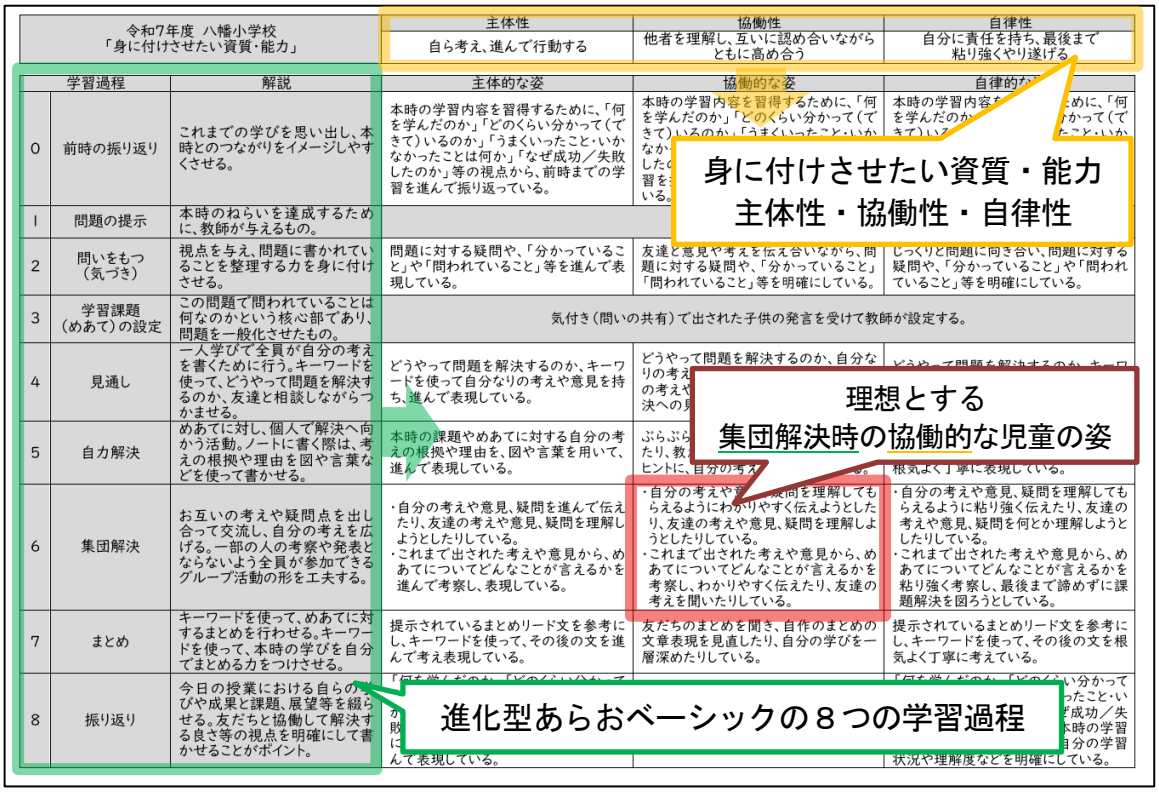
担当	氏名	My mission（質的改善を図るべき授業の課題）
なでしこ	清水　麗	語彙を増やし、対話的な学びをどう取り入れるか
さくら	道喜　亜香里	次時の学習の意欲につながる振り返りをどう取り入れるか
１年１組	吉田　有伶	自分の考えを広めたり、 深めたりする活動の充実
２年１組	渡邊　亮太	学びが広がる・深まる対話活動の追究
３年１組	坂本　恭兵	全員が足並みを揃えて自力解決に入るために見通しをどう工夫できるか
たんぽぽ	村上　正順	対話的な話合いをどうつくりだすか
４年１組	徳永　朝美	全員が参加するグループ活動を行う
５年１組	中村　界斗	子どもたちの問いをどう生み出すか
６年１組	平島　勇太	全員が発言できる集団活動
６年２組	守屋　数人	全員が自分なりの見通しをもつためには

イ　方法

（ア）対話を通して「My mission」を作成する。

今年度の「身に付けさせたい資質・能力」である主体性・協働性・自律性を横軸に、進化型あらおベーシックの８つの学習過程を縦軸にとり、それぞれの学習過程における理想の児童の姿を２７のマトリクス表に整理する**【資料３】**。

その表と、授業における児童の姿を比較することで、自分の授業の課題を明確にする。明らかになった課題を「My mission」として設定し、解決に向けてどのような手立てが必要かを職員で対話しながら考え、課題解決への見通しを立てる。



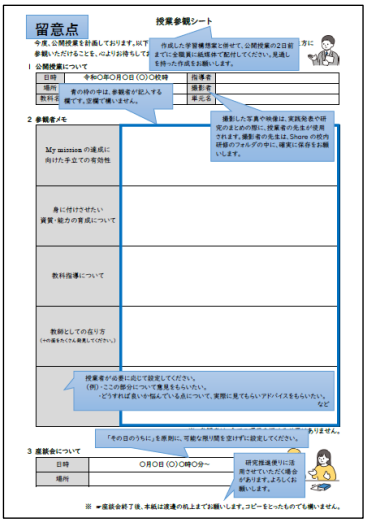
令和7年度 八幡小学校 「身に付けさせたい資質・能力」			主体性 自ら考え、進んで行動する	協働性 他者を理解し、互いに認め合いながらともに高め合う	自律性 自分に責任を持ち、最後まで粘り強くやり遂げる
学習過程		解説	主体的な姿	協働的な姿	自律的な姿
0	前時の振り返り	これまでの学びを思い出し、本時とのつながりをイメージしやすくさせる。	本時の学習内容を習得するために、「何を学んだのか」「どのくらい分かって（できて）いるのか」「うまくいったこと・いかなかったことは何か」「なぜ成功／失敗したのか」等の視点から、前時までの学習を進んで振り返っている。	本時の学習内容を習得するために、「何を学んだのか」「どのくらい分かって（できて）いるのか」「うまくいったこと・いか	本時の学習内容を[illegible]ために、「何を学んだのか[illegible]かって（できて）いる[illegible]たこと・いか
1	問題の提示	本時のねらいを達成するために、教師が与えるもの。			
2	問いをもつ（気づき）	視点を与え、問題に書かれていることを整理する力を身に付けさせる。	問題に対する疑問や、「分かっていること」や「問われていること」等を進んで表現している。	友達と意見や考えを伝え合いながら、問題に対する疑問や、「分かっていること」「問われていること」等を明確にしている。	じっくりと問題に向き合い、問題に対する疑問や、「分かっていること」や「問われていること」等を明確にしている。
3	学習課題（めあて）の設定	この問題で問われていることは何なのかという核心部であり、問題を一般化させたもの。	気付き（問いの共有）で出された子供の発言を受けて教師が設定する。		
4	見通し	一人学びで全員が自分の考えを書くために行う。キーワードを使って、どうやって問題を解決するのか、友達と相談しながらつかませる。	どうやって問題を解決するのか、キーワードを使って自分なりの考えや意見を持ち、進んで表現している。	どうやって問題を解決するのか、自分なりの考え[illegible]の考え[illegible]決への見[illegible]	どうやって問題を解決するのか、キーワ[illegible]
5	自力解決	めあてに対し、個人で解決へ向かう活動。ノートに書く際は、考えの根拠や理由を図や言葉などを使って書かせる。	本時の課題やめあてに対する自分の考えの根拠や理由を、図や言葉を用いて、進んで表現している。	ぶらぶら[illegible]たり、教[illegible]ヒントに、自分の考え[illegible]。	根気よく丁寧に表現している。
6	集団解決	お互いの考えや疑問点を出し合って交流し、自分の考えを広げる。一部の人の考察や発表とならないよう全員が参加できるグループ活動の形を工夫する。	・自分の考えや意見、疑問を進んで伝えたり、友達の考えや意見、疑問を理解しようとしたりしている。 ・これまで出された考えや意見から、めあてについてどんなことが言えるかを進んで考察し、表現している。	・自分の考えや意見、疑問を理解してもらえるようにわかりやすく伝えようとしたり、友達の考えや意見、疑問を理解しようとしたりしている。 ・これまで出された考えや意見から、めあてについてどんなことが言えるかを考察し、わかりやすく伝えたり、友達の考えを聞いたりしている。	・自分の考えや意見、疑問を理解してもらえるように粘り強く伝えたり、友達の考えや意見、疑問を何とか理解しようとしたりしている。 ・これまで出された考えや意見から、めあてについてどんなことが言えるかを粘り強く考察し、最後まで諦めずに課題解決を図ろうとしている。
7	まとめ	キーワードを使って、めあてに対するまとめを行わせる。キーワードを使って、本時の学びを自分でまとめる力をつけさせる。	提示されているまとめリード文を参考にし、キーワードを使って、その後の文を進んで考え表現している。	友だちのまとめを聞き、自作のまとめの文章表現を見直したり、自分の学びを一層深めたりしている。	提示されているまとめリード文を参考にし、キーワードを使って、その後の文を根気よく丁寧に考えている。
8	振り返り	今日の授業における自らの学びや成果と課題、展望等を綴らせる。友だちと協働して解決する良さ等の視点を明確にして書かせることがポイント。	「何を学んだのか」「どのくらい分かって[illegible]敗[illegible]んで表現している。		[illegible]分かって[illegible]ったこと・い[illegible]成功／失[illegible]本時の学習[illegible]自分の学習状況や理解度などを明確にしている。

【資料３　身に付けさせたい資質・能力×進化型あらおベーシックの８つの学習過程のマトリクス表】

（イ）「学習構想案」及び「授業参観シート」を作成して公開授業を行う。

教師間で実践が共有され、課題に基づいた授業改善のサイクルが校内全体に広がることを意図し、各教師が年間３回行う公開授業を位置付ける。授業者は、自らが設定した「My mission」に基づき、授業における課題意識を明確にした上で、「学習構想案」及び「授業参観シート」を作成し、実践を公開する**【資料４】**。

授業の実施にあたっては、学習指導要領解説や県立教育センター発行の「教サポ」等、実践の根拠となる資料を明示する。学年部以外の職員の授業参観は自由とし、管理職については可能な限り参観する体制をとる。

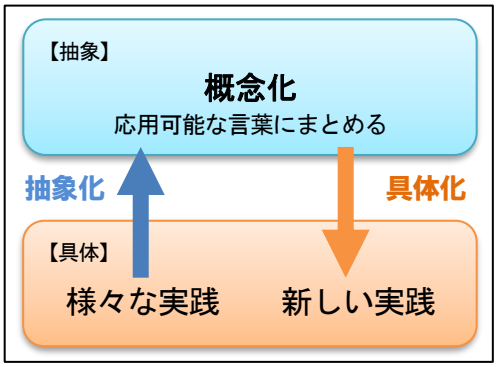


【資料４　授業参観シート】

参観者は、「授業参観シート」を活用して授業を見る視点を明確にしておくことで、授業者の「My mission」の達成に向けた手立ての有効性に目を向けながら参観できるようにする。

（ウ）授業について振り返る「座談会」を行う。

公開授業後の放課後、学年部で３０分程度の座談会を行う。授業者が設定した「課題解決の手立て」の有効性について、「授業参観シート」をもとに議論する。前半では授業の良かった点や改善点を共有し、後半ではそれらをもとに【概念化】と【具体化】を図り、参加者の授業への応用につなげる。具体と抽象を往復することで、実践の汎用性を高めていく**【資料５】**。



【資料５　概念化のイメージ図】

また、座談会では授業者がファシリテーターを務め、感想の発表会ではなく対話的な学びの場とする。学年部以外の職員も自主的に参加できるようにし、管理職は助言を行う。

（エ）実践発表会で「My mission」に対する取組の状況を紹介する。

事前に作成したプレゼン資料を用いて、自身の「My mission」に関する取組状況を１０分程度で発表する。発表の際には、「学習指導要領解説」や「教サポ」等、実践の根拠となる資料を明示する。

発表後の協議では、前半に実践の良かった点や改善点、疑問点の共有、悩みの相談等を行う。後半は座談会と同様に、【概念化】として実践の本質を言語化し、【具体化】としてそれぞれの授業にどう生かすかを考える場を設ける。

（２）取組２「My project（質的改善を図るべき校務分掌上の課題）」の達成に向けて

ア　内容

担当	氏名	My project（質的改善を図るべき校務分掌上の課題）
食育	清水　麗	給食委員会の活性化
図書館教育	道喜　亜香里	児童の読書活動を活性化すること
人権教育	吉田　有伶	人権やさしさ委員会の活性化
研究主任	渡邊　亮太	実りある校内研修の推進
人権教育	坂本　恭兵	児童の人権意識の向上
環境教育	村上　正順	環境・保健委員会の活性化
生徒指導	徳永　朝美	みんなが楽しく過ごせる学校づくり（いじめ０）
体育主任	中村　界斗	委員会と協力して、児童の運動量を増加させる
教務主任 第６学年主任	平島　勇太	①みんなのためになる教務主任としての仕事の在り方 ②６年生児童を中心に取り組む特別活動の活性化
運営・体育委員会	守屋　数人	運営・体育委員会の活性化
養護教諭	上野　緩実	健康な生活を送る基礎を培うこと。意識化・行動化

イ　方法

（ア）対話を通して「My project」を作成する。

自身が担う校務分掌において、どの場面で、どのようなことに取り組めば「身に付けさせたい資質・能力」の育成につながるかを、プロジェクトチームでの対話を通して明確にする。その際、業務過多を避けるため、業績評価と関連付けて「My project」を設定し、取組の一元化を図る。場合によっては、児童ではなく教師を対象とし、教師の変容を通じて児童の育成を目指すことも可能とする。

また、取組の成果をどのように見取るか、評価の見通しもあらかじめ立てておき、設定した「My project」は全体で共有する。

（イ）「ＰＪ会議（取組状況の中間報告会）」を行う。

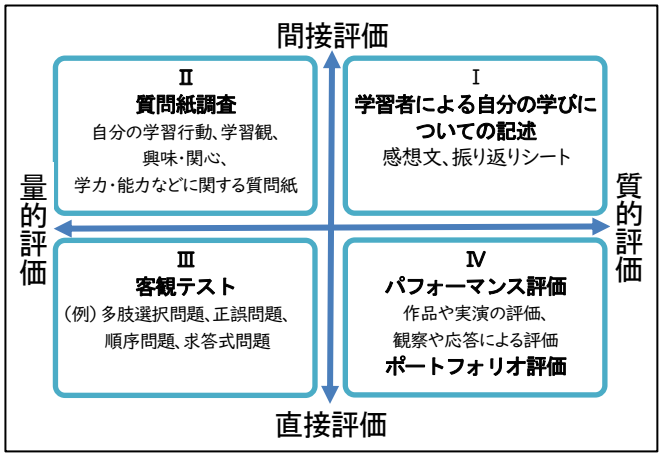
日々のプロジェクトの質的改善に向けた取組について、現段階での成果や課題、改善策、悩んでいる点などを整理し、５分程度で発表できるプレゼン資料を作成する。

PJ 会議では、プロジェクトチームごとに発表と協議を行う。発表者はファシリテーターを兼ね、実践内容を共有した上で、良かった点や改善点、疑問点、悩みなどについて対話を深める。この発表と協議をチーム内の全員が行い、最後に全体での共有を図る。会の終わりには、管理職より指導・助言を受け、取組の改善につなげていく。

（３）研究の評価

昨年度の研究の課題を改善するために、今年度は「身に付けさせたい資質・能力」が育まれたかどうかを多角的に見極め、評価の信頼性と妥当性を高めたいと考えた。

そこで、熊本県立教育センターの久保直文・田上俊郎指導主事からの助言を踏まえ、松下佳代が提唱する「学習成果の評価の４つのタイプ」を参考にする【資料６・７】。



【資料６　学習成果の評価の４つのタイプ】

松下佳代が提唱する「学習成果の評価の４つのタイプ」では、「直接評価－間接評価」の軸と、「量的評価－質的評価」の軸によって大きく４象限のⅠ～Ⅳタイプに分類される。

直接評価 or 間接評価	直接評価とは、学習者が何を知り、何ができるかを実際に問うことで、学習成果を直接測定・評価する方法である。 間接評価とは、学習者自身に学習過程や成果について自己報告させ、それを基に評価する方法である。
量的評価 or 質的評価	量的評価と質的評価の明確な違いは、評価の対象となるデータが数値化できるかどうかにある。量的評価は客観的な数値データを扱い、質的評価は主観的な記述や観察など、数値化しにくいデータを扱う点に違いがある。

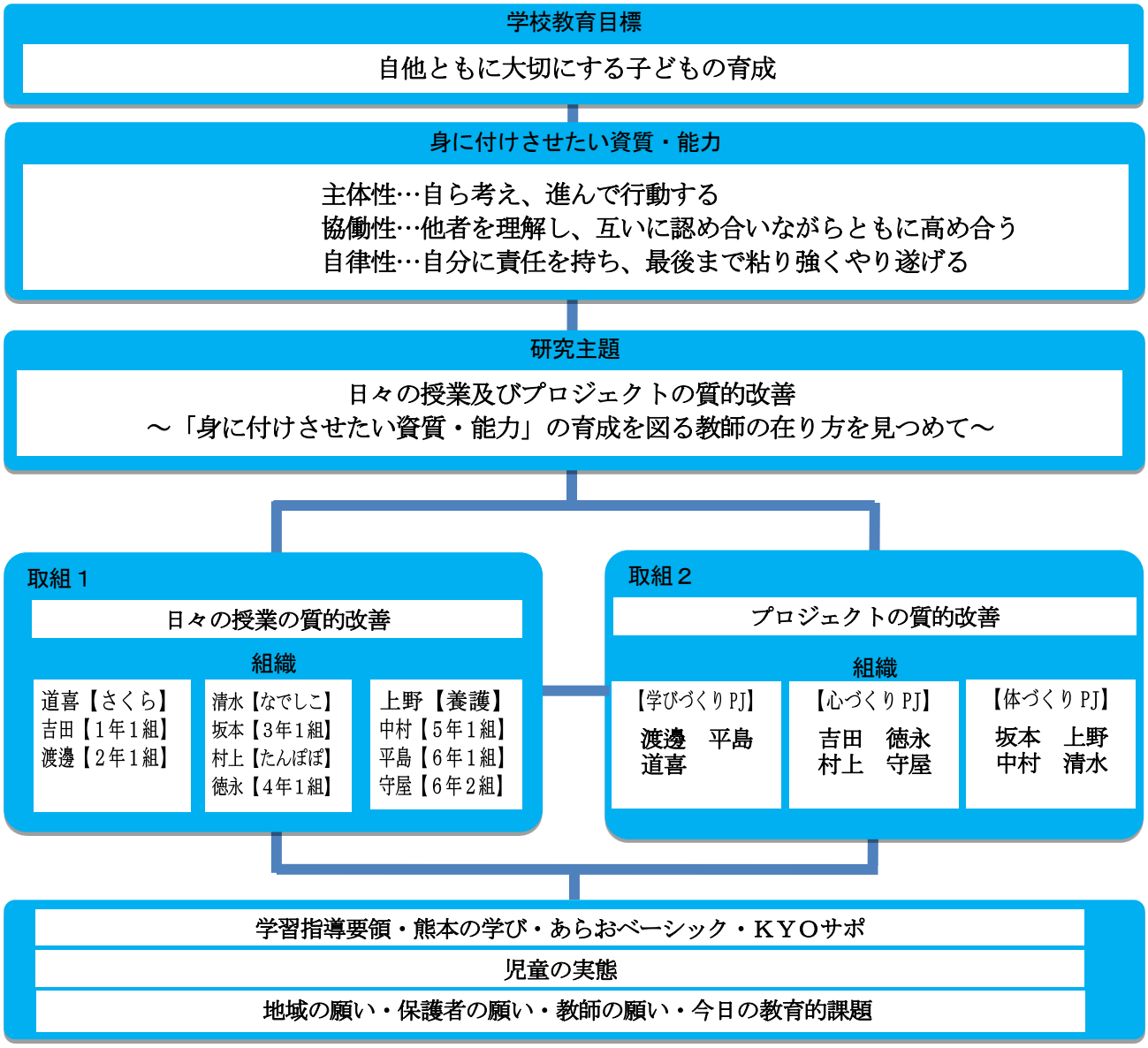
【資料７　松下佳代(2016)「アクティブラーニングをどう評価するか」松下佳代・石井英真（編）『アクティブラーニングの評価』東信堂，3-25.】
※　松下佳代…京都大学大学院教育学研究科　教育学研究科 教授

これらを参考にし、以下のような視点で今年度の本校の研究の評価を行う【資料８】。

	評価形態	My mission （質的改善を図るべき授業の課題）	My project （質的改善を図るべき校務分掌上の課題）
タイプⅠ （間接×質的）	各職員で設定	感想文や振り返りシートへの記述内容等の質的な変容を見取る。	
タイプⅡ （間接×量的）	全体で統一	「身に付けさせたい資質・能力」×「進化型あらおベーシック８つの学習過程」を基に、全校で統一した質問項目を作成する。 その質問項目に対して、児童自身が年間２回（５月・１２月）自己評価をする。その結果として表れる数値の変化を見取る。	本年度の学校生活を通して、児童自身が「身に付けさせたい資質・能力」の育成を実感できたかを問う質問紙を全校で統一して作成する。 その質問項目に対して、児童自身が年間２回（５月・１２月）自己評価をする。その結果として表れる数値の変化を見取る。
タイプⅢ （直接×量的）	本校の研究の評価として適さないため、評価をしない。		
タイプⅣ （直接×質的）	各職員で設定	レポートや作文、制作物、実技試験、演奏、他者とのディスカッション・ディベート、スピーチ、プレゼンテーション、質疑応答による理解度の確認等から、その質的な変容を見取る。	

【資料８　評価の構造と実施計画】

（４）構想図

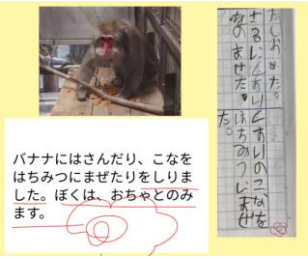


４　研究の実際

（１）取組１「My mission（質的改善を図るべき授業の課題）」について

各自が立てた My mission の達成に向けて、年間を通して授業の質を高める取組を進め、公開授業を節目として振り返りを行い、その記録を積み重ねていった。

ア　道喜亜香里教諭の実践【資料９】

My mission	次時の学習の意欲につながる振り返りをどう取り入れるか。
My mission 設定の理由	自己肯定感の低い児童が多く、自己肯定感の低さから学習意欲が高まらない現状があるため。
第１回公開授業（6/23）　自立活動「めざせ、話し合い名人！　魚つりゲーム」	
具体的な実践内容	≪主体性≫「わかったこと」「がんばったこと」「もっとしりたいこと」の視点やキーワードを提示する。 ≪協働性≫「友達のよかったところ」の視点を提示する。 ≪自律性≫問い返しながら振り返りの内容を深めていく。
○成果 ●課題	○作戦を話し合う活動の動画を見ることで、本時のめあてに対する学びを深めることができた。また、自分たちの話し合い方の良いところを見つけることができていた。 ○「わかったこと」「がんばったこと」「もっとしりたいこと」の視点に加えて、「友達のよかったところ」の視点を提示することで、自分の良さ、お互いの良さに気付くことができた。 ●それぞれの期待される単元のゴールの姿を、単元や本時の初めに児童と共有していなかったため、振り返りの内容に深まりがなかった。
第２回公開授業（11/7）　国語科「よんでたしかめよう　うみのかくれんぼ」	
具体的な実践内容	≪主体性≫導入で児童と問いを共有し、掲示しておく。 ≪協働性≫考えを話すとき、「○○さんと同じで（ちがって）」の言葉を使うようにする。 ≪自律性≫本文やキーワードを黒板に掲示する。（視覚的に振り返ることができるようにする。）
○成果 ●課題	○前時までの自分の考えと本時の学習を終えた自分の考えを進んで比較することができた。 ○問いを３択から選ぶものにしておくことで、友達と考えを比べることができた。 ○本時の授業での自分の頑張りが、友達に認められたことが可視化されて喜ぶ児童の姿が見られた。 ●国語化を中心に取り組んできたが、他の教科にも取り入れていかなければならない。 ●「緑のペンで囲むのが上手でした。」という振り返りを言った児童が２人いた。キーワードを使って振り返りをする練習を繰り返していきたい。
第３回公開授業（2/6）	
令和８年２月６日に行う荒尾市教育委員会指定の研究発表会と兼ねる。	
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 ７月の説明的な文章の学習では、「音読のときに、大きな声を出せました。」と振り返りをしていた児童が、１１月の説明的な文章の学習で、「（問いに対する）答えが３つあることがわかりました。」「前に習った『つぼみ（説明的な文章）』の文の書き方と似ていました。」など、めあてに沿った振り返りや、キーワードを使った振り返りをすることができるようになった。 【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ 直接×質的】 ・導入で児童の問いを掲示しておくことで、前時までの自分の考えと本時の学習を終えた自分の考えを進んで比較することができていた。 ・振り返りシートに、本時の児童のノートや挿絵の写真を貼ることで、本時で学習したことを思い出しながら、具体的に振り返ることができていた。 ・本時の授業での自分の頑張りが友達に認められたことが可視化され、喜ぶ姿が見られた。 ・単元計画表を見ながら自分たちの学習を評価したり、係活動シートに自己評価したりすることで自分の頑張りに自分たちで◎を付けて喜んだり、△を付けて具体的に改善策を考えたりしていた。  以上のことから、視覚的、具体的に振り返りや評価をすることや、児童が評価活動に参加できるようにすることに効果が見られたため、どの教科でも共通して取り組んでいきたい。	

【資料９　道喜亜香里教諭の実践の記録】

イ　吉田有伶教諭の実践【資料 10】

My mission	自分の考えを広めたり、深めたりする活動の充実
My mission 設定の理由	１年生の子どもたちは、普段から発表に意欲的である。しかし、自分の考えを言ったところで満足してしまい、その先の「説明する」「理由を述べる」「友達の考えを聞いて深める」といった活動につながりにくい面がある。 そこで、友達に自分の考えを分かりやすく伝えたり、友達の考えを聞いて自分の考えを広げたりすることに楽しさを感じてほしいと考え、My mission を設定した。
第１回公開授業（6/20）　算数科「のこりはいくつ　ちがいはいくつ」	
具体的な実践内容	《主体性》「いちねんせいのすてきなことば」を確認し、友達に伝えられるようにする。 《協働性》全員が意見をもって参加できるように、ペアで確認したり、グループで確認したり機会を設ける。 《自律性》「いちねんせいのすてきなことば」を確認し、友達に伝えられるようにする。
○成果 ●課題	○入学してからの２か月間で、ほとんどの児童が自分の考えを持ち、友達に伝えることができるようになった。「なんて書いた？」「○○さんはどう思う？」などの言葉を使って、友達と対話することができている。 ●「深める」活動ができていない。友達の考えを聞いた後、友達の考えについて疑問を持ったり、質問をしたりして、自分の考えに生かすことはできていない。活動の工夫が必要である。
第２回公開授業（10/27）　音楽科「せんりつで　よびかけあおう」	
具体的な実践内容	《主体性》自分が工夫したいことについて、キーワードをもとに伝える時間を設定する。 《協働性》他のグループの発表を聞き、真似したい工夫を見つける時間を設定する。 《自律性》グループでどんな工夫ができるかを話し合う時間を設定する。
○成果 ●課題	○いつも友達に意見を伝えられず、話し合いに参加できない児童がいる。しかし、自分の工夫したいことを付箋紙に書いて共有させることで、その児童も話し合いに参加することができていた。 ●子どもたちとキーワードの共有ができていなかった。子どもたちにとっては、難しいキーワードになってしまい、自分が工夫したいことを決められない子どもたちも多かった。子どもたちにとって、もっとわかりやすいキーワードを提示する必要があった。
第３回公開授業（2/6）	
令和８年２月６日に行う荒尾市教育委員会指定の研究発表会と兼ねる。	
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 振り返りの時間には、今日の授業を振り返って、「わかったこと」「がんばったこと」「友達から学んだこと」「もっと知りたいこと」をみんなの前で発表している。 はじめは、「～がわかりました。」「～をがんばりました。」と話す子どもたちが多かったが、「○○さんが計算の仕方がわからなくて困っていたときに、やり方を教えてくれました。」や「○○さんの～の説明がわかりやすかったです。」のような内容が増えてきた。 考えを広めたり、深めたりする活動が充実してきたことで、友達の考えに目を向け、自らの学習に生かそうとする姿が見られるようになった。 【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ 直接×質的】 入学当初から、友達と意見を交流することに抵抗感が強い児童がいたため、その児童を中心に観察をした。 その児童は、以前に比べて、「広める」活動時には参加できるようになってきている。キーワードを有効的に活用することで、自分の考えを持てるようになった。また、交流の形を工夫することで自信をもって対話に参加できるようになった。 それ以外の児童の様子を見ても、自分の考えを明確にもち進んで交流をする姿や、「どうして？」「わけは？」と尋ねながら友達の考えを引き出そうとする姿が見られ、対話に対する意識の高まりが感じられる。 本年度、考えを広めたり深めたりする活動を充実させてきたことで、子どもたちが少しずつ成長しながら、生き生きと対話をする姿を見ることできた。	

【資料 10　吉田有伶教諭の実践の記録】

ウ　渡邊亮太教諭の実践【資料 11】

My mission	学びが広がる・深まる対話活動の追究
My mission 設定の理由	私が My mission を「学びが広がる・深まる対話活動の追究」としたのは、授業での対話の質に課題を感じたからである。実際には「対話活動」と言いながら、相手を意識しない一方的な発表が続き、子ども同士の考えがつながらない場面が多かった。子どもたちが「伝えたい」「知りたい」と思いながら互いに影響し合う対話こそ、学びを広げ深める力になる。そうした場づくりを目指し、対話の在り方を見直すことを自分の My mission とした。

第１回公開授業（6/27）　算数科「100 より大きい数をしらべよう［３けたの数］」

具体的な実践内容	《主体性》数の線と言葉だけでなく、数カードや図、式など、自分が表現しやすい方法を選択して考えを表現できるようにする。 《協働性》「〇〇さんは、どう思う？」という言葉を共通言語として掲示し、意識させる。 《自律性》キーワードを活用した構造的な板書を行う。
〇成果 ●課題	〇「数カード」「数の線」「式」「言葉」といった、自分の考えを表す方法をキーワード化して提示したことで、児童は自分がどの方法で表現したかを明確にでき、友達と対話する際に表現方法の違いや共通点を比較しながら考えを広げることができた。 ●学び合い２における抽象化や一般化への移行が突然で、子どもたちの集中力や思考が途切れる場面が見られた。具体にこだわるべき場面と一般化をにじませるタイミングを授業の中で明確にし、段階的に導く工夫が必要だった。 ●「話し合いましょう」と指示されるから話すだけの形式的な対話に留まっており、子ども自身の主体的な思考や発言が十分に引き出せていない。子どもが自然に伝えたり聞いたりしたくなる状況設定が課題である。

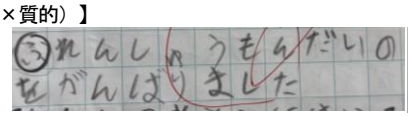
第２回公開授業（11/17）　算数科「かけ算（２）九九をつくろう」

具体的な実践内容	《主体性》①これまでに学習してきた交換法則や同数累加、乗法の性質、分配法則などを、子どもたちの言葉でキーワード化しておき、課題解決を図る際にどの考え方を使うか自分で選択できるようにする。 ②実際の生活場面に即した問題を作成し、提示する。 《協働性》アレイ図や式、言葉など、自分が表現しやすい方法を選択できるようにする。 《自律性》「〇〇さんの考えを、となりの人に説明できるようにしよう」「相手が『なるほど！』って言ってくれたら成功！」のように、友達の考えを他者に説明する場面を設ける。
〇成果 ●課題	〇教科書の問題を生活場面に置き換え、「７×４」に焦点化したことで、子どもが自分事として問題を捉え、解決したいという思いが高まった。実際に起こり得る場面だからこそ知的好奇心が刺激され、自分の考えを明確にもとうとする姿が見られた。そのことが、友達に伝えたい、友達の方法も聞きたいという対話への主体的な姿勢につながった。 〇キーワードを「たすたす法」「前たす法」「入れかえ法」「分けたす法」というように児童の言葉で設定したことで、子どもたちは自分の考え方を自分達の言葉で捉えやすくなり、友達とのやり取りの中でもそのキーワードを手がかりに比較したり関連付けたりすることができた。結果として、対話が広がりやすく、考えがつながる土台づくりにつながった。 〇これまでは話型や対話の形式など「型」の成立に意識が向いていたが、公開授業までの歩みを通して、対話を活性化するのは型ではなく、子どもが考えをもち、友達と関わりたくなる問題設定や発問であると強く実感した。特に、学習が苦手な児童ほど、自分の考えをもつことが対話の出発点である。 ●対話が自然に生まれる課題設定がまだ安定していない。「友達に伝えたい」「友達の考えを聞きたい」と思える状況を毎時間作るには、子どもが考えやすい順序や手がかりを授業に意図的に組み込むなど、題材や学習の流れをさらに丁寧に設計する必要がある。

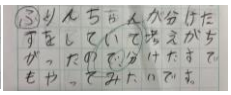
本年度の実践を振り返って

【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】

毎時間の振り返りを「わかったこと」「がんばったこと」「友達から学んだこと」「うまくいかなかったこと」「もっと知りたいこと」の視点で記述させ、特に友達の名前を登場させることを推奨した。



【５月の児童Ａの振り返り】



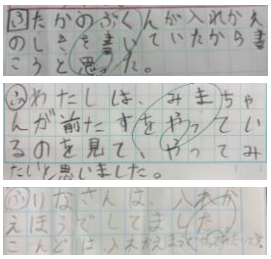
【12 月の児童Ａの振り返り】

年間を通してその振り返りを見取ることで、対話活動を通して学びが広がったり深まったりした子どもたちの様子を明確に把握することができた。

例えば、児童Ａは、当初は「がんばったこと」を抽象的に述べるだけで、学びの具体的な広がりや深まりが見えにくかった。しかし、My mission の達成に向けて様々な手立てを講じる中で、徐々に友達の発言や考えに触れた学びを記述するようになり、対話を通して学びの質が変容したことを確認することができた。

また、それ以外の児童においても、友達の名前を挙げて「〇〇さんの意見を聞いて考えが変わった」「△△さんの説明でわからなかったところがわかった」など、具体的な相互作用を記述する姿が増え、対話が学習を支える重要な手段として機能していたことが明らかになった。

これらの変化は、対話を軸とした授業改善が子どもたちの学びに確かな効果をもたらしたことを示すものであり、本研究の成果として位置付けられる。



【他の児童の振り返り】

【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的）】

対話の様子を定期的に映像で記録し、その質的変容を見取った。特に３名の抽出児童の変容を見取った。

児童Ｂは、当初は学習内容の理解に不安があり対話に消極的であったが、生活場面に基づく課題提示と、数カード・図・式など表現方法を自分で選べる手立てにより、まず「自分の考え」をもてるようになった。後半には、キーワードを用いて自分の考えを整理し、「〇〇さんはこう言っていたから…」と友達の考えに触れながら発言する姿へと変化した。

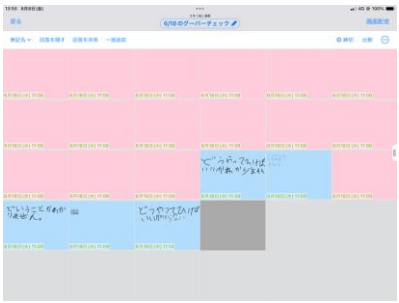
児童Ｃは、理解はできていても言語化に苦手意識があったが、構造的な板書とキーワードによる整理によって説明の道筋をつかみやすくなった。やり取りの場面でも、「〇〇さんはどう思う？」の共通言語が対話を支え、後半には友達の考えを引用しながら理由づけして話す姿が増え、協働的に思考を深める姿へと変容しつつある。

児童Ｄは、本来の学習意欲は高いものの発言は控えめであった。しかし、自分の表現方法を選択できる学習環境と、友達の考えを説明し合う場面の設定によって、対話への参加意欲が高まった。終盤には「〇〇さんの考えに自分はこう付け加えたい」と主体的に対話をリードする姿が見られるようになった。

映像を通して抽出児童の対話活動を追うことで、考えを伝え合う力の高まりを感じ取ることができた。また、対話したくなる問題提示や発問を取り入れた手立てを積み重ねてきたことで、生き生きと対話する姿へと変化していく様子を実感できた。

【資料 11　渡邊亮太教諭の実践の記録】

エ　坂本恭兵教諭の実践【資料 12】

My mission	全員が足並みを揃えて自力解決に入るために見通しをどう工夫できるか
My mission 設定の理由	・自力解決前に行うグーパーチェック（問題を解けるかどうかの意思表示）と自力解決中の児童の様子が一致していないため。 ・学習に苦手意識のある児童が、「恥ずかしい」「自分の現状を上手く伝えられない」などの理由から発言することが少なく、本当に必要なヒントをもらうことができていないため。
第１回公開授業（6/18）　算数科「長いものの長さのはかり方と表し方」	
具体的な 実践内容	**≪主体性≫問いをシンプルに** 本時の学習内容以外の問い（立式など）は全員で確認し、本時は何を考える学習なのかを児童に分かりやすくする。 **≪協働性≫無記名で質問しやすく** ロイロノートの無記名提出機能で、自分のものだと知られることなく質問できるようにする。 **≪自律性≫ヒントを残す** 出されたヒントを板書に残し、いつでも確認できるようにする。 
○成果 ●課題	○無記名で質問できるため、安心して「分からない」ということを言えていた。 ○児童側からの質問を明確に把握できるようになったため、こちら側もヒントを出しやすくなった。 ●「カードに質問を書く→カードを提出する→全員で確認する」という方法だと、通常よりも時間がかかってしまった。
第２回公開授業（9/29）　算数科「あまりのあるわり算」	
具体的な 実践内容	**≪主体性≫問いをシンプルに** 本時の学習内容以外の問い（立式など）は全員で確認し、本時は何を考える学習なのかを児童に分かりやすくする。 **≪協働性≫ホワイトボードで会話しやすく** 今回は自力解決ではなく、ホワイトボードを使った３人組のグループ学習から行い、解き進めながら分からないところは、その場で質問できるようにする。 **≪自律性≫意思表示カードの活用** 自分の現状を言語化することが難しい児童のために、どう考えているかを指し示す意思表示カードを用意し、話し合いに活用する。
○成果 ●課題	○３人の小グループなので、安心して質問することができていた。 ●グループ学習を中心に行ったため、一人一人の定着度を見取ることが難しかった。 ●教科書の問題をそのまま使用していたため、場面を想像しづらい（解決の見通しを持ちづらい）様子があった。
第３回公開授業（2/6）	
令和８年２月６日に行う荒尾市教育委員会指定の研究発表会と兼ねる。	
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 公開授業の際の児童の振り返りシートに次のような記述があった。 ・名前が公開されないまま質問できるから、安心して聞くことができました。 ・ヒントを出すことで、青カード（質問）の人が悩んでいることを解決してあげることができてよかったです。 ・ホワイトボードを使った学習では、最初だけじゃなく、分からなくなったときにいつでも質問できたので良かったです。 これらの記述からも My mission の成果を実感することができた。 **【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的】** ・通常のグーパーチェックを行った時と比べ、学習に苦手意識がある児童の主体的な学習参加が見られた。 ・教科書の問題文をそのまま使用するのではなく、生活に基づいた問題にすることで、問題場面が想像しやすくなり、一層解決への見通しが持ちやすくなると感じた。	

【資料 12　坂本恭兵教諭の実践の記録】

オ　村上正順教諭の実践【資料 13】

My mission	対話的な話し合いをどうつくりだすか
My mission 設定の理由	本学級は、少人数の異学年集団（３年２名、４年５名）であり、理解力や表現力に差が見られる。 また、授業への参加意欲も、その時々で異なる。そのため、話し合い活動では、誰かの意見に従うだけだったり、そもそも話し合いに参加しなかったりすることもある。 そこで、話し合いに参加しようという意欲を持てるテーマや、自分の意見を出したくなる手立て等を研究し、対話的な話し合いを体験させたいと考えた。

第１回公開授業（6/30）　学級活動「花ランド『子どもの国』大作戦を成功させよう」

具体的な 実践内容	**《主体性》子どもたちが話し合いに参加したくなるよう活動の設定。** 話し合う内容を子どもたちが好きなお店屋さん作りにする。低学年の生活科でお店屋さんを作っていたため、活動内容もイメージしやすい。 **《協働性》自分の意見を言いたくなるような提案を原案に入れる。** 原案の中に、あえて子どもたちが反対したり、修正したりするような提案（「お店は勝手に先生が決める」）を入れて、自分の意見を言いたくなるようにする。 **《自律性》何のために取り組むか意義をはっきりとさせる。** なでしこ学級やさくら学級の子どもたちが参加して、楽しいと思える会にすることを原案のめあてに明記して、相手意識を持たせる。
○成果 ●課題	○話し合いのテーマ「花ランド『子どもの国』大作戦を成功させよう」を設定し、意欲的に話し合いに全員参加することができた。 ○お店の決め方を「先生が勝手に決める」という提案をすることで、自分の考えを「言いたくなる」「発表したくなる」気持ちを引き出すことができた。 ○自分の考えを発表することに満足感を持たせることができた。また、次回の話し合いへの意欲を高めることができた。 ●自分の考えを発表することはできたが、友だちの意見を聞いて自分の考えを深めたり、修正したりすることまでには到達しなかった。次回は、そこを目指したい。

第２回公開授業（9/17）　学級活動「生活リズムを見直そう」

具体的な 実践内容	**《主体性》子どもたちの実態が示す資料と生活リズムの大切さが分かる資料を用意する。** 子どもたちのアンケート結果を活用する。１時間目の授業を受けるときの本音（「眠い」「体がだるい」）をクイズ形式で提示し、それを改善するためには生活リズムの確立が必要であることをプレゼンや動画で説明する。 **《協働性》対話的な話し合いができるように、話し合いの話型を提示する。** 相手に理由を尋ねる言い方（「どうして～ですか。」）や、具体的に内容を尋ねる言い方（「何を」「どうやって」等）を示して、ただの意見発表に終わらず、対話的な話し合いに近づける。 **《自律性》考えや意見を交流しやすいように、司会を置いたり、車座になって話し合わせたりする。** 司会者を置くことで、自分たちで話し合いを進める意欲を高める。また、車座になることで相手の顔を見て聞いたり、呟きを聞き取りやすくなったりして、話し合いの雰囲気が和やかになるようにする。
○成果 ●課題	○互いの元気アップ作戦を交流する中で、最初、「おもしろいから動画を見る」という作戦を立てていた子が、みんなの話を聞きながら、「動画を見るときに、表示される時刻に気をつける」と作戦を修正していた。 ○授業の翌日の朝、元気アップ作戦の取り組み状況を尋ねると、全員がきちんと取り組んでいた。ある子は、母親に頼んでいつもよりも早い時刻に布団を敷いてもらい就寝したと話していた。子どもの生活リズムを改善しようという意欲につながったと思われる。 ●生活リズムの改善には保護者の協力が必要なために、一人ずつ子どもが考えた作戦と趣旨を伝えるプリントを授業後に配付した。しかし、夜間に習い事をしている子への対応や、意欲を継続させるための工夫が必要だった。

第３回公開授業（2/6）

令和８年２月６日に行う荒尾市教育委員会指定の研究発表会と兼ねる。

本年度の実践を振り返って

【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】

児童の振り返りには、以下のような記述が見られた。

・みんなで話し合うのは、楽しかったです。魚つりの話し合いでは、商品の風船を作りました。Ｃちゃんが「作ろう。」と言いました。「どうやって作るの？」と聞いたら、「折り紙の本を見て作ろう。」と言いました。Ｃちゃんが知っていたので、分からないところは教えてもらいました。たくさん商品ができました。話し合いの時は、みんなで協力しました。話し合いは楽しかったです。みんなの考えが聞けたからです。前よりも話し合いが好きになりました。前は聞いてばかりで自分で話すことはなかったからです。【Ａさんの感想文より】

・私は、自分が決めた元気アップ作戦をみんなに言うことができました。みんなに言う時は、緊張しませんでした。私が発表する時は、みんなは私の顔を見て聞いてくれました。Ｄさんが頷いてくれました。他の人は、「Ｂちゃん、話し方上手。」と言ってくれて、嬉しかったです。話をするのが楽しくなりました。Ｄさんが、「こう言ったら、簡単に分かりやすく言えるよ。」と言ってくれました。その通り言うと、言いやすかったです。話し合いが好きになりました。【Ｂさんの感想文より】

これらの記述から、話し合いに参加しようという意欲を持てるテーマや、自分の意見を出したくなる手立て等を工夫してきたことで、子どもたちが対話することに対して前向きな気持ちになったり、その意義を見いだしたりしている様子を把握することができた。

【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的】

・対話の出発点である自分の考えを伝えたり、発表したりすることに対しての意欲が高まったり、発表そのものを楽しく感じたりする子どもが増えてきた。

・お互いの発表の良いところを見つけたり、「こんなふうにしたらいいよ。」とアドバイスを送ったりすることができるようになった。共に向上しようとする意欲を感じた。

・分からない時は、「分かりません。もう１回言ってください。」と恥ずかしがらずに言えるようになってきた。尋ねられた子も何が分からないのか聞き返し、説明していた。対話が少しずつ深まってきたと思う。

【資料 13　村上正順教諭の実践の記録】

カ　徳永朝美教諭の実践【資料 14】

My mission	全員が参加するグループ活動を行う
My mission 設定の理由	私が My mission を「全員が参加するグループ活動を行う」としたのは、学習が苦手な児童も主体的に意欲をもって授業に参加するためには、どんな授業が望ましいのかと考えたからである。 そのためには、教師が授業の集団解決場面に力を入れて手立てを考えることで、子ども達が自分たちの力で解決していこうという考えになるのではないかと思い、My mission を設定した。
第１回公開授業（6/13）　特別の教科 道徳「目覚まし時計」	
具体的な 実践内容	《主体性》全員が動いて、友達のノートを見て、自分の考えと比較することができる。 《協働性》展開の部分で、友達からの意見が少ない人のところに行くことができる。 《自律性》いろいろな友だちのノートに自分の印を書くことができる。
○成果 ●課題	○子ども達が、意欲的に学ぼう、友だちとの交流しようとする姿が見られた。 ●「わかりやすく伝えたい」という思いが強くなり、つい教師の言葉が多くなってしまい、発問が複雑になってしまった。発問は分かりやすく、シンプルにする必要がある。 ●何のために「集団活動」でノート展覧会を行うのか、意図やねらいを子どもたちと共有できていなかった。
第２回公開授業（10/16）　特別の教科 道徳「布田保之助の心」	
具体的な 実践内容	《主体性》全員が動いて、友だちのノートを見て、自分の考えと比較することができる。 《協働性》友だちの意見を理解しようという姿勢で読み、質問することができる。 《自律性》友だちが聞いてきた質問に対して、諦めずに伝えようとすることができる。
○成果 ●課題	○「集団活動」の場面で、友だちと会話をすることが定着してきたので、ペア学習や、班学習、全体での話し合いをスムーズに行うことができた。 ○ノート展覧会を「テクテクタイム」と名づけて、友だちの意見と自分の意見を比較することができた。 ○学習シートにハート図を入れたことで、振り返りの時に表現が苦手な児童も、色を塗ることで気持ちを表現できるようになった。 ●「集団活動」の場面で、分かる児童が分からない児童に教える時間になっているように感じた。 ●深い学びになっていない児童が見られた。
第３回公開授業（2/6）	
令和８年２月６日に行う荒尾市教育委員会指定の研究発表会と兼ねる。	
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 集団解決場面に関する児童の振り返りには、次のような記述が見られた。 ・友だちの意見を聞いて、そんな考え方があるんだと思った。 ・○○さんの考え方は、自分の考えと違うけど、良いと思った。 ・いろいろな友だちのすごい意見が聞けて良かった。 自分の考えを表現することが苦手な児童も、友だちの意見を聞いて書くことができていた。また、「テクテクタイム」や「ノート展覧会」を行うことで、全員が参加する様子が見られた。 【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ 直接×質的）】 集団活動での様子を観察し、その質的変容を見取った。特に、学習や自分の考えを表現することが苦手な児童に注目し、変容を見取った。 （４月の児童の様子） ・学習自体に苦手意識を持っており、集団活動時も動かずに話さない姿が多く見られた。 ・教師から声をかけられると動くが、友だちと学習以外の話をしている場面が見られた。 （１２月の児童の様子） ・テクテクタイム」や「ノート展覧会」などで、声を掛けなくてもすぐに友だちと交流する姿が見られた。 ・「ノート展覧会」では、友だちのノートに印をつけ、自分の感想を書くことできるようになった。あらおベーシックをもとに、教師の一方的な対話ではなく、子ども達が自分たちで考えを深め、学び合うことだという意識を児童自身が持つことができた。集団活動において自分たちで話し合うことの楽しさ等を見つけていく姿が見られた。	

【資料 14　徳永朝美教諭の実践の記録】

キ　中村界斗教諭の実践【資料 15】

My mission	子どもたちの問いをどう生み出すか
My mission 設定の理由	私が My mission を「子どもたちの問いをどう生み出すか」とした理由は主に２つある。 １つ目は、昨年度の My mission で、子どもたちの「対話」について研究していく中で、教師自身の授業力に課題を感じたことである。いくら子どもたちに対話の仕方等を身に付けさせたとしても、本当に「話し合いたい」「考えたい」と思えなければ、子どもたちの本当の意味での対話力につながらないと考えた。 ２つ目は、教材研究の時間が少なくなっていることである。限りある時間の中で、日々の授業を考えていくときに、何か視点やねらいを絞った教材研究の必要性を感じた。よりよい教材研究が、よりよい授業導入部分を作り出し、子どもたちの問いへとつながると考えた。
第１回公開授業（6/10）　社会科「米づくりのさかんな地域」	
具体的な 実践内容	《主体性》「なぜ？」と思わせるような導入の工夫、考えることをはっきり、わかりやすく。 《協働性》ペア、ぶらぶらタイム、グループでの活動を入れる。問いを全員で共有する。 《自律性》子どもが出す考えを肯定的に受け止め、認める。良いところを伝える。 ・今回の授業は単元の導入部分を公開した。「問い」を子どもたちの中で作り出すことにおいて、単元導入時はとても重要だと考え、本時を公開することにした。最も重要視したことは、この単元でどんな学習をするのか、どんな新しいことを学ぶことができるのか、子どもたちにワクワク感を持たせることであった。そのために、「なぜ新潟は米づくりがさかんなのか」という発問を中心に授業を展開させた。
○成果 ●課題	○「なぜ新潟は米づくりがさかんなのか」という問いに対して、今回は「自然環境」という視点で考えていった。まず、米の生産量が多い都道府県をクイズ形式で提示し、共通点を問うと「北」という考えが出た。そして、「気温が低い」という視点まで繋がったところで、「世界の米づくりは、気温が高いところで多く作られている」ということがわかる資料を提示した。そこで、子どもたちの中に「ズレ」が生まれ、「寒いことが関係ないのであれば、なぜ米づくりがさかんな地域が北の地域に多いのだろう」という問いが生まれた。 ●導入の「問い」から、実際に思考し始めるまでに多くの時間がかかってしまった。問いを共有してから、めあてを立ててノートに書く、まとめの書き出しを共有してノートに書く、といった作業が入り、「はやく調べたい！」という熱が冷めてしまったような感覚になった。学習活動の順番や内容は、今後吟味する必要がある。
第２回公開授業（10/2）　算数科「分数と小数　整数の関係」	
具体的な 実践内容	《主体性》易しい問題を先に提示することで、全員が本時の課題を理解できるようにする。 《協働性》「商の表し方をどうしたらよいか」について、友だちと考えを共有する場面を設定する。 《自律性》子どもの考えを肯定的に受け止め、認め、良いところを伝える。 ・今回も前回と同様に、単元の導入部分を公開した。私自身の研究が教科横断的で、汎用性のあるものになっているかを吟味するために、前回は社会科での授業であったが、今回は算数科の授業を公開した。今回の算数科の授業で重要視したことは、「問い」が生まれたときに子どもたちが「できそう！」と思えるかということであった。社会科と違い、算数科は「分かる」以上に「解ける」かどうかが子どもたちの学習意欲に影響を及ぼすため、「やってみよう！」という意欲をもたせることを大切にした。
○成果 ●課題	○「わり算の商の表し方は小数だけ？」という発問を皮切りに授業をスタートした。「１÷２」「１÷３」といった本時で扱う問題よりも易しい問題を出し、本時でどのようなことを学習するかが分かるように工夫した。また、図を使いながら、本時の問題と関連付けて確認をしていった。「分数でも表せそう」となった後も、見通しの段階で答えに近いところまで共有することで、全員が解けそうという感覚が持てるようにした。 ●「ズレ」は自分自身だけのものだけでなく、「友だちとの考えのズレ」「既習事項とのズレ」など、色々なズレがあり、そこを子どもたちが自覚できるように共有し、焦点化する必要があった。その「ズレ」を視点に教材研究を行っていく必要がある。
第３回公開授業（2/6）	
令和８年２月６日に行う荒尾市教育委員会指定の研究発表会と兼ねる。	
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 第１回公開授業における子どもたちの振り返りで、「同じような気候の条件がある北海道は、なぜ新潟より面積が広いのに、生産量は新潟の方が多いのかが気になりました。」というものがあった。そういった次への「問い」を自ら考えられるような力を子どもたちに期待すると同時に、自分自身の授業で、子どもたちのそのような姿を今後も増やしていきたいと思う。 【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的）】 子どもたちの変化として、「めあて」と「問題」を分けて認識できるようになっていることに気づいた。これまでは、問題に向き合ったときに、その問題を解決することだけに焦点化されていた。しかし、「問い」（めあて）を立てるという作業を繰り返していくことで、問題を解決することによって何が分かるのか、どんなことが証明されるのかという概念的なめあてを設定できるようになってきた。 My mission にあるような「問いをどう生み出すか」に対するアプローチは大きく２つあると考える。１つは、教師による問題の提示や発問など、子どもたちに対する投げかけである。そしてもう１つは、子どもたち自らが、問いの生み出し方を学んでいくことである。 今回の実践では前者のことについて多く考えてきたが、子どもたちの成長から、後者のアプローチの方法について気付くことができた。「問い」を生み出すことは、その授業に１本の柱を立てるようなものであり、それができることによって、その後の子どもたちの様子も活発になっていくことが分かった。	

【資料 15　中村界斗教諭の実践の記録】

ク　平島勇太教諭の実践【資料 16】

My mission	全員が発言できる集団活動
My mission 設定の理由	・「熊本の学び」や「あらおベーシック」において大切にされている誰一人取り残さない学習、全員参加の学習を行いたいと考えたから。 ・学級の実態として、発言を積極的にする人と、遠慮してしまう人がいるため、全員が発言した上で学び合える授業をスタンダードにしていき、これからの人との関わりにつなげてほしいと考えたから。
第１回公開授業（5/23）　家庭科「朝食から健康な１日の生活を」	
具体的な 実践内容	《主体性》発言したくなる授業の工夫 （１）クイズ形式で既習内容の確認　（２）子どもが考えたくなる問い （３）学習活動の明確化　（４）テンポの良い授業展開 （５）集団活動の場面を多く設定し、話すことを明確にする。（どちらの方が栄養バランスがよいか、まとめに入るキーワードを話し合う等） 《協働性》発言場面での学級のルール （１）「全員発言（発言できていない人にふる『どう思う？』）」 （２）「発言への反応『確かに…』『いいと思う』『そうだね』」 《自律性》上記の取組を通して高める。
○成果 ●課題	○発言が苦手な児童３名の学習の様子を職員で記録した。３名の児童は複数回発言できており、相手の発言への反応を返す姿も見られた。また、友達に発言を促す言葉を使うこともできていた。
第２回公開授業（9/1）　社会科「武士の政治が始まる」	
具体的な 実践内容	《主体性》発問の数と内容の精選 ①「日本と元どちらが勝ったでしょう？」（資料からの推測） ②なぜ日本が勝ったのに武士は幕府（北条氏）に不満を持つようになったのかな？） 話し合う際の材料 ①振り返り場面での既習事項「ご恩と奉公」の確認 ②厳選した資料の提示 《協働性》発言場面での学級のルール ①「全員発言（発言できていない人にふる『どう思う？』）」 ②「発言への反応『確かに…』『いいと思う』『そうだね』」 《自律性》上記の取組を通して高める。
○成果 ●課題	○児童は５回以上発言できていたように思う。 ●職員による抽出児童の観察から、発言の数が少なかったり、「同じです。」という言葉でやり取りが終わっていたりする児童がいたことが明らかとなった。 ●学習活動が多いため、ペアや４人組で発言する時間が短くなってしまった。
本年度の実践を振り返って	

【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】

・授業についての振り返りシートより

> ・ペアやグループで話し合いをする時、勇気が出なくて話を友達にふることができてない時もあるので、勇気を出して友達に「どう思う？」など問いかけてみたい。
> ・友達と話す時、自分から先に話して、その後に「〇〇さんはどう考えた？」と尋ねることができていて、友達もちゃんと自分の考えを伝えてくれた。時には、「同じ考えだね。」と言われて嬉しくなり、ある人の考えをみんながすぐには理解できない時には「どういうこと？詳しく教えて。」と言って、もう一度説明をしてもらうことでみんなで納得することもできた。

・「友達との対話が授業以外での対話に生かされていると思いますか。」という問いに対して、

> ・友達が１人でいる時に話しかけている。
> ・最近は今まであまり話すことがなかった男子とも話すようになった。話していてとても楽しい。
> ・7 月頃は、休み時間ほとんど自分から話しかけることはできていなかったけど、12 月頃は少しずつ自分から話しかけることができるようになって嬉しい。

これらの記述から、日常の授業を１つのきっかけとして、生活場面での人との関わり方にも良い影響が表れていると捉えることができる。

【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的】

・公開授業の際に、発言の少ない児童を職員が分担して観察した。その結果、どの児童も発言が多数できていた。

・抽出児童の観察より、「同じです」に留まるのではなく、自分の言葉で表現するなど発言の質を高めていく必要があるという意見が出された。

【資料 16　平島勇太教諭の実践の記録】

ケ　守屋数人教諭の実践【資料 17】

My mission	全員が自分なりの見通しをもつためには
My mission 設定の理由	子どもたちが自分の現在地と目標、そしてそこへ向かう手立てを主体的に考えられることが、学習の質を高める上で不可欠だと感じた。授業では、教師の指示を待って学びを進める児童も多く、課題の本質や学ぶ意義を十分に捉えられないまま取り組んでいる姿が見られた。その結果、自分自身の学習の躓きに気付けず、活動の見通しが持てないまま時間を要してしまうといった課題が生じていた。 そこで、子ども一人一人が「自分は何をめざし、どのように取り組むか」を考え、表現する場があると、全員が見通しを持ち、授業に挑むことができるのではないかと考え、My mission を設定した。
第１回公開授業（6/4）　国語科「時計の時間と心の時間」	
具体的な 実践内容	《主体性》課題解決への見通しがもてるように、３年生のときに学習した「すがたをかえる大豆」を用いて、筆者の文章構成への意図を読み取る活動を設ける。 《協働性》キーワードをもとに考えた課題解決への見通しを友達と伝え合う場を設ける。 《自律性》子どもが興味・関心を持つ問いを設定する。
○成果 ●課題	●子どもたちにとって一層分かりやすい授業にするためには、情報量を増やすのではなく、情報を精選し、シンプルな授業を目指すことが大切だと分かった。 ●学習リーダーが話した後に同じ内容を教師が説明していた。学習リーダーを信じ、子どもの言葉で進めていくことが重要だと痛感した。 ●国語科の「読むこと」の「構造と内容の把握」では、「叙述（描写）を基に捉えること」が大切であり、教師が叙述に着目させるような手立てや問い返しが必要だった。
第２回公開授業（11/19）　算数科「比例の関係をくわしく調べよう」	
具体的な 実践内容	《主体性》比例のグラフを書く際のポイントを、キーワードを活用して想起させる。 《協働性》他者と対話して、見通しを明確にする場を設定する。 《自律性》児童が興味・関心を持ちやすい日常生活の場面に即した問いを設定する。
○成果 ●課題	○児童の思考の流れに沿ってキーワードを精選したことで、それらを活用しながら、見通しを組み立てていく児童の様子が見られた。キーワードを最大限に活用することができた。 ○キーワードがあることで、自力解決場面や協働解決場面においても子どもたちの思考が自然と方向づけられ、一人一人が自分の考えを持って課題解決に臨むことができた。 ○「枚数とともに変わる数はないか？」「厚さと枚数の関係から 300 枚を求めることができる？」などの発問や問い返しを工夫したことで、意図的に子どもたちの思考を広げたり、深めたりすることができた。 ●１つ１つの活動の時間が短かったため、じっくりと学びを進めたい子にとっては、機械的に解き進める時間となってしまい、比例の本質を理解しないまま正答を導く児童もいた。 ●課題を解決した後に、もう一度生活場面に立ち返り、「実際には…」と画用紙の枚数を数え始めることで、黒板の文字や数字に終始する授業からの脱却を図ることができたように思う。
第３回公開授業（2/6）	
令和８年２月６日に行う荒尾市教育委員会指定の研究発表会と兼ねる。	
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 第２回公開授業の際の児童の振り返りでは、「キーワードを使うと、問題が解きやすくなる。」「キーワードがあることで、自分の考えが発表しやすい。」という記述が見られた。 このことから、全員が自分なりの見通しを持つためには、キーワードを精選したり、キーワードを何度も活用しながら黒板上を移動させたりしていくことが重要だと改めて実感した。 【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的）】 年間を通して３人の児童を中心に、学びの姿の変容を見取ってきた。 抽出児童Ａに関しては、年度当初は自分の考えを言語化することに課題を抱えていた。しかし、学習に先立って見通しをもつことにより、自身の考えを整理できるようになり、授業では以前よりも活気をもって発表する姿が見られた。 抽出児童Ｂに関しては、年度当初は問題や課題が理解できないと、授業に意欲的に参加できていなかった。しかし、見通しを明確にもつことができるような手立てを打ち、その質的改善を図ってきたことで、問いに対して自分なりの見通しを持てるようになってきた。 抽出児童Ｃに関しては、補助がないと自分の考えを発表することが難しかった。しかし、キーワードを用いることで、進んで発表する様子が見られるようになった。 年間を通した抽出児童の変容からも、My mission 達成に向けた取組の成果があったと言える。	

【資料 17　守屋数人教諭の実践の記録】

（２）取組２「My project（質的改善を図るべき校務分掌上の課題）」について

各自が立てた My project の達成に向けて、年間を通じてその質的向上を図り、その取組を記録に残していった。

ア　道喜亜香里教諭の実践【資料 18】

My project	児童の読書活動を活性化すること
My project 設定の理由	令和６年の一人当たりの年間読書冊数が、各学年の目標冊数に達していない学年があったため。

実践１「図書委員会による企画」

具体的な実践内容	≪主体性≫ ◎学校図書館に足を運びたくなるような楽しい企画、運営を図書委員会の児童とともに行う。梅雨の時期の読み聞かせや、七夕飾りの掲示、読書月間のゴールドカードの配付、図書室謎解きなど、児童目線で楽しいと思う企画を話し合って決め、準備や運営を行う。 ◎児童集会の発表で使うスライドや、発表原稿を初めから児童だけで作成する。案を委員長が作り、委員会の時間に全員で話し合い、完成させていく。
○成果 ●課題	○読み聞かせには、低学年が多く参加して集中して聞いていた。読み聞かせを聞いた帰りに、本を借りて帰る児童の様子も見られた。 ○ゴールドカードをもらうために、読書月間内に本を読む児童が増えた。 ○読書月間の取組を児童集会で発表したことで、取組が周知され、児童の読書意欲が高まった。 ●企画には低・中学年児童の参加が多く、高学年の参加が少なかったため、高学年にとって魅力のある企画を考えていきたい。 ●読書月間では、読む本に偏りがあったため、様々な分野の本を読む仕掛けを考えていきたい。

実践２「読書カードの取組」

具体的な実践内容	≪主体性・自律性≫ ◎昨年度の一人一人の読書冊数を児童に知らせ、昨年度より多く本を読む目標を持たせる。毎月、継続して読書冊数を伝えることで、年間を通して自分の目標冊数を意識できるようにしたい。読書カードには、「昨年度の○月」「今年度の○月」の読書冊数を記入して提出させ、スタンプを押して返却する。
○成果 ●課題	○昨年度の自分の読書冊数を知ることで、読書冊数の目標を、その子に応じて立てることができた。 ○読書カードの取組をすることで、担任の先生方の読書に取り組ませる意欲も高まった。 ●ロイロノートを活用して、毎月の読書冊数を知らせたが、児童に知らせることに手間がかかるため、取組が遅れる学級があった。知らせる方法を改善する必要がある。

実践３「おすすめの本の紹介」

具体的な実践内容	≪協働性≫ ◎図書委員会によるおすすめの本の紹介 ・児童集会で、低・中・高別のおすすめの本を紹介する。 ・先生方におすすめの本の紹介文を書いてもらい、図書室前に掲示する。 ・図書委員会の児童のおすすめの本のポップを作り、児童の顔写真と共に図書室内に掲示する。 ◎図書室を利用した児童によるおすすめの本の紹介 図書室に、おすすめの本の題名、紹介文、絵を描くシートを設置し、自由に取り組めるようにする。できたシートは、本と共に図書室に掲示する。
○成果 ●課題	○積極的に本の紹介シートに記入する児童が多く、紹介された本は貸し出されることも増えた。 ○児童や先生方のおすすめの本に興味を示している児童が多く見られた。 ●本の題名だけ紹介するシートと、絵や文も加えて紹介するシートの２種類を準備していたが、後者に記入する児童は比較的に少なかった。

本年度の実践を振り返って

【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】

・図書委員会による取組については、「（図書委員会の企画を）喜んでくれる人が多かった。（企画を考えるときに、）自分の意見を言う人がいた。」と実感している図書委員の児童がいる。一方で「企画に参加する高学年が少ない。」と課題を挙げている児童も少なくない。高学年にとって魅力のある企画を考えていく必要がある。

・読書カードについては、「去年より、どのくらい多く読めたかがわかりやすくなった。」「読書カードがあることで、本を読む人が増えた。」と答える児童が多かった。その一方で、「自分の読書冊数を知るのに時間がかかる。」など取り組みにくさを感じている児童も少なくない。児童や職員にとって取り組みやすい形に改善していく必要がある。

・おすすめの本の紹介については、「先生や友達の好きな本を読んでみようという人が増えた。」「おすすめの本が半分以上借りられている。」と取組の成果を感じている一方で、「もっと見やすい位置に掲示した方が効果的だと思う。」など改善点を挙げている児童もいる。

【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的）】

児童目線による図書委員会の企画で、昼休みも図書室に足を運ぶ児童が増えてきた。高学年は、昼休みにも、行事の練習や委員会の仕事をしなければならいため、利用する時間がないことも読書量が少ない原因の１つである。図書室を活用した授業など、授業の中で本に親しむ時間を取り入れていく必要がある。

読書カードの取組を行ったことで、先生方が児童に対して、読書をするように呼び掛けたり、一緒に図書室へ行ったりされることが増えた。

おすすめの本を見て、「この本おもしろそう。」と手に取る児童が見られた。今後も読書に興味を持ってもらえる取組や掲示を続けていきたい。

【良かった点（成果）】

去年読んだ本の数と今年読んだ本の数を比べて、去年より多く読んだなとか分かりやすいし、もっと本を読もうと考えるきっかけになったこと

【良かった点（成果）】

喜んでくれる人が多かった
自分の意見を言ってくれる人がいた

【良かった点（成果）】

この人が読んだなら読んでみようかなと思うこと

【資料 18　道喜亜香里教諭の実践の記録】

イ　吉田有伶教諭の実践【資料 19】

My project	人権やさしさ委員会の活性化
My project 設定の理由	昨年、６年生を担任し、委員会活動には課題を感じていた。児童主体の委員会活動にしたいという思いはあったものの、うまくいかないことも多く、先生から言われて児童が行動することも多かった。 そこで計画的に活動し、自分たちでやり切ったと思える委員会活動にするために、私が担当する「人権やさしさ委員会」の活性化を My project に設定した。
実践１　「ロイロノートの活用」	
具体的な 実践内容	≪主体性、協働性≫ １年生担任ということもあり、６年生と話をする機会が少ない。 そこで、ロイロノートの共有ノートを活用し、６年生に連絡をしたり、共有したい資料をいつでも見たりできるようにする。
○成果 ●課題	○委員会活動表をみんなに共有することで、その日にすべきことを委員会に所属する児童が事前に把握することができるため、見通しをもって活動に参加することができていた。 ○出張等で委員会に参加できないこともあったが、共有ノートを見て集会に向けた活動の進捗状況を知ることができた。 ●作成した委員会活動表を活用できたときもあるが、できていないことの方が多かった。委員会前に十分な打ち合わせができず、委員会活動表を掲示できないこともあった。
実践２　「ありがとう集会や平和集会の取組」	
具体的な 実践内容	≪主体性、自律性≫ ４月初めに集会活動の内容について確認をした。ロイロノートの共有ノートにも年間の計画を貼り付け、意識して取り組むことができるようにした。 【ありがとう集会】 ５月の運動会を振り返って、「ありがとう」の手紙を書く活動を計画する。 【平和集会】 ７月の委員会活動では、平和集会で読む本を決め、委員長を中心に役割分担を行い、練習を進める。
○成果 ●課題	○ありがとう集会はこれまでも行ってきた活動だが、６月に実施したのは初めてである。運動会後というタイミングもあり、運動会練習でみんなを引っ張ってくれた６年生や応援リーダーに手紙を書く児童が多く、これまで以上に有意義な時間となった。委員会の子どもたちも大きな手応えを感じていた。 ○自分たちで練習時間を決めて集会に向けた練習を行うことができていた。 ●平和集会は暑さの影響で、Zoom 配信による実施となった。 子どもたちは何度も練習を重ねていたものの、Zoom 配信を想定した事前準備が十分でなく、「声がよく聞こえなかった」という意見が寄せられた。
実践３「ありがとうの木の取組」	
具体的な 実践内容	≪協働性≫ 11 月の人権月間に合わせ、「ありがとうの木」の作成に取り組む。友達からしてもらって嬉しかったことや、友達に言われてうれしかった言葉、友達の素敵な姿などをハート型の紙に書いて、掲示スペースに貼る。 昨年は、１階に掲示されていたが、「今年はどの学年にも取り組んでほしい」という子どもたちの思いもあり、低・中・高学年それぞれのフロアに設置する。
○成果 ●課題	○各学年のフロアに設置したことで、多くの児童が積極的に取り組んでいた。用意していたハート型の紙が足りなくなるほど書いてくれた学年もあり、委員会の子どもたちが毎日確認してくれていた。 ●取り組んだところで終わってしまっているため、次につながる活動となるよう、こちらから声掛けをしていく必要がある。
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 児童による４月の振り返りでは、「意見を考えるのを頑張った。」「案を出せた。」と自分が頑張ったことやできたことを書く児童が多かった。 しかし、最近の振り返りでは、「ありがとうの木の活動の準備をみんなで協力しながら頑張った。」「集会をうまくできるように練習してよかった。みんなが聞きやすいように工夫したい。」と、協力することや改善したいところなどにも目を向けて振り返ることができるようになった。 **【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的】** これまでは、委員長が中心になって、人権やさしさ委員会の活動を進めていた。しかし、少しずつ委員長以外の６年生の児童が進んで活動に取り組むようになった。活動計画が事前にわかっていることで、見通しをもって進んで取り組む姿につながったと考えられる。 また、その良い影響が５年生にも変化をもたらしており、これまでは、６年生から言われたことをするだけに留まっていたが、６年生の姿を見て、自分たちから行動する場面も見られるようになった。お互いに良い刺激を与え合いながら、人権やさしさ委員会の活動が活発になってきていることを感じている。	

【資料 19　吉田有伶教諭の実践の記録】

ウ　渡邊亮太教諭の実践【資料 20】

My project	実りある校内研修の推進
My project 設定の理由	NITS が示すように、教師の学びの姿は子供の「主体的・対話的で深い学び」と相似形であり、教師自身が主体的に学び続けることが求められている。従来の形骸化した校内研修から脱却し、自律的・協働的に学び合う研修への転換は不可欠である。そこで、教職員が互いの実践に学び合い、力量を磨き合いながら、教師としての在り方を問い続ける研修文化の構築を目指して、このテーマを据えた。

実践１「自主研修会の開催」

具体的な実践内容

≪主体性、協働性≫

全員参加の公的研修とは別に、都合がつく職員が自由に参加できる自主研修会を実施する。自身の授業実践や学級経営を振り返ったり、テーマに沿った学びを深めたりすることで、新たな気づきを得たり、技術を習得したりすることができるようにする。

また、この場をお悩み相談や困りごとの共有の場として活用することも考えている。少人数で率直に意見を交わす中で、互いの実践から学び合い、同僚性を高めながら、教師一人ひとりが安心して成長できる研修文化の構築を目指す。

○成果 ●課題

○描画・版画指導やＩＣＴ活用術など、先生方のニーズに合った研修を実施することができた。

○同僚が講師を務めることで、研修後も日常的に相談したり助言を求めたりできる関係が生まれ、校内における学びのつながりが広がった。

○市教育委員会の指導主事をお招きし、動画を視聴しながら、市内の学校として求められている実践を確実に押さえる場としても機能した。

○リラックスした雰囲気の中で学級の現状を共有したり、よりよい学校づくりや学級づくりについて語り合ったりする場としても活用することができた。自主研修会でのやり取りを契機に、授業実践や学級経営に関するアイディア、教材や制作物を積極的に共有する職員の姿も見られ、学び合う文化の醸成につながった。

●課題としては、教師の力量形成や同僚性を育む場として、自主研修会の実施回数をさらに充実させたいという思いがあったものの、教職員数の不足や日々の多忙感の影響もあり、継続的に開催することが難しい場面が多かった。

第１回	体験から始める、教師のための生成 AI 活用術（ファーストステップ編）
第２回	「あらおベーシック」に学ぶ ～１年生道徳授業の実践から見える工夫～
第３回	図工の引き出しをいっしょにふやしませんか？
第４回	Benesse ミライシードの使い方講座

【今年度実施した自主研修会のテーマ】

【自主研修会の様子】

実践２「研究推進便り『まなびや』の発行」

具体的な実践内容

≪協働性、自律性≫

各教師の実践が孤立してしまわないように、校内の学びを共有する仕組みとして、研究推進便り「まなびや」を発行していく。公開授業での視点や授業づくりに生かしたいポイントを紙面で整理し、授業動画をＱＲコードで示すことで、各自が好きなタイミングで振り返られるようにしたい。

授業で見て、座談会で意見を交わし、紙面で再確認するという流れを設けることで、学びを確かめながら共有できる環境づくりを目指す。また、本通信を通して参観できなかった教師にも学びを届けられるようにしたい。

○成果 ●課題

○各教師の研究の進捗や授業実践の工夫、児童の姿などを整理し、「見える化」することで、授業で取り上げられた手立てや工夫について、授業者に直接尋ねる教職員の姿が見られた。実践に踏み込んだ対話が広がっており、教職員が互いの実践に関心を寄せ、学校全体で研究に取り組む意識の醸成につなげることができた。

○児童アンケートの結果を整理・分析した内容を掲載することで、本校の現状について教職員間で共通理解を図ることができた。また、指導主事からいただいた助言や指摘を速やかに記事として整理し共有することで、校内研の改善点を全職員で把握できた。これにより、研究の方向性を揃えたり、次の実践に生かす視点を早期に共有したりすることが可能となり、校内研の質的向上を支える手立てとしても機能した。

●研究推進便りを双方向の学びにつなげるために、感想欄やミニアンケートを設け、気づきや意見を共有できる仕組みをつくりたい。

【研究推進便り「まなびや」】

実践３「学びをつなぐサイクルの確立」

具体的な実践内容

≪協働性、自律性≫

「学びをつなぐサイクル」として、準備・相談→実践→座談会での振り返り→次の準備という流れを、全て校内研修の時間内に確保する。従来は、準備や資料作りは個人に任されることが多かったが、これも研究活動の一環と捉え、研修時間内に行うことで、個人の負担を減らしつつ、職員全員で学びを共有できる環境をつくる。

○成果 ●課題

○資料作りや構想案の相談に関わり合うことで、職員同士が授業の工夫や手立てについて意見交換する場面も増え、互いの実践から学び合う校内文化の醸成につながった。

●勤務時間外に資料作成や準備を行う姿が依然として見られることは大きな課題であり、負担感を十分に軽減できていない点が明らかとなった。時間的・心理的負担を減らし、勤務時間外労働に頼らない研究の進め方を整えていく必要がある。

本年度の実践を振り返って

【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】

年度末に研究全体を振り返り、次年度の構想を練る場を全体で設けることを念頭に、12 月時点では日頃の先生方とのやり取りをもとに「タイプⅠ 間接×質的」の評価とした。

これらの声から一定の評価を得られていることが分かる。一方で、準備・作成時間の不足という課題も明らかになった。「実りある校内研修の推進」を本当に実現するためには、次年度に向けて、実践発表化や構想案の形式、年間計画の見直しなど、確実な改善が必要である。

- 研究推進便りを通して、参観できなかった公開授業の授業動画を視聴できることがありがたい。
- 学びを共有できることで、自分の授業改善に生かせる気づきが得られる。
- 自主研修会で学んだ生成 AI を活用し、業務効率化を図ることができて助かっている。
- 描画・版画指導で学んだことを自分の授業に取り入れ、手応えを感じた。
- 実践発表会に向けた資料作りや構想案作成の時間が足りず、どうしても勤務時間外に作業するしかなかった。

【先生方からの声】

【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ 直接×質的）】

第１回公開授業で自身の成果や課題、改善点を明確にした後、第２回に向けて同僚と相談しながら準備する姿が多く見られた。また、他の先生の実践を自分の授業に取り入れて改善を試みる様子もあった。自分の授業における課題克服に取り組む中で、「前回の授業での工夫をこう変えてみました」「この取組は自分の実践でも応用できそう」といった意見を交わしながら、互いに助言や気づきを共有する場面が自然に生まれている。こうしたやり取りを通して、安心感と刺激を与え合う空気が少しずつ職員室全体に広がっている。

【資料 20　渡邊亮太教諭の実践の記録】

エ　坂本恭兵教諭の実践【資料 21】

My project	児童の人権意識の向上
My project 設定の理由	・人権学習や委員会活動の取り組みなどを通して、児童に人権というものを深く考えて実生活に生かしてほしいと考えたから。 ・人権に関する研修や実践講座で学んだこと等を職員で共有することで、先生方の人権意識が高まり、結果として授業や学校生活を通して児童にも還元されていくと考えたから。
実践１「児童に向けた取組」	
具体的な 実践内容	≪主体性、協働性、自律性≫ ・年３回以上の人権学習（全学年） ・年間２回の人権集会の実施（全学年） ・人権標語の作成（全学年） ・人権ポスターの作成（３、６年） ・ありがとう集会での「ありがとうの手紙」渡し（全学年） ・感謝を伝える「ありがとうの木」の掲示（全学年） ・人権啓発センター、児童センター訪問（３、４年生） ・人権フェスティバルへの参加（５年生参加、全学年 zoom での視聴） ・熊本県人権子ども集会動画視聴（全学年） ・好きなこと発表会（１月開催予定、全学年）
○成果 ●課題	○児童が楽しみながら人権について考える取組がたくさんできた。 ●一つ一つの取組には積極的に参加していたが、実生活に生かそうとするところまで伸ばす必要があると感じた。
実践２「先生方に向けた取組」	
具体的な 実践内容	≪主体性、協働性、自律性≫ ・人権啓発センター、児童センター訪問の日程調整 ・年間を通して１回は人権の研修や実践講座に参加できるような調整 ・代表レポーターのレポート読み合わせ ・人権フェスティバルの検討会 ・人権学習の資料配付 ・人権に関する研修や実践講座等の復講 「本当のことを知る」ために
○成果 ●課題	○先生方に人権について学んでいただく機会を確保することができた。 ●先生方への取組が、児童に還元できているかを判断する方法が難しかった。
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 人権に関する取組について児童より以下のような振り返りがあった。 ・ありがとうの木は一日２枚までだったけど、毎日２枚書いてたくさんの「ありがとう」を伝えることができました。 ・人権ポスターを描く時には、いじめや差別をなくそうという気持ちで頑張って書きました。 ・人権集会では作文を発表しました。自分のことを発表するのは緊張したけど、みんながしっかり聞いてくれて嬉しかったです。 人権に関する研修や実践講座等の復講に対して、先生方から以下のような振り返りがあった。 ・人権レポートの「はじめに」が、毎回「学生の頃に人権学習を受けたがあまり覚えていない」といった内容になってしまっていた。もっと自分自身を語る内容を綴っていきたい。 【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的】 ・人権レポート報告や人権フェスティバルを担当者任せにせず、全員で考えていったことで、レポートや発表内容の質の向上につながっただけでなく、先生方の人権意識も高まったように感じる。 ・復講を行ったのが主担者である私だけになってしまったので、他の先生方にも復講をしていただくことで、さらに人権意識を向上させることができたと思う。	

【資料 21　坂本恭兵教諭の実践の記録】

オ　村上正順講師の実践【資料 22】

My project	環境・保健委員会の活性化
My project 設定の理由	昨年度、環境・保健委員会を担当し、子どもたちとリサイクルの呼びかけや小動物の世話、花の栽培活動、トイレットペーパーや手洗いせっけんの補充、トイレのスリッパ並べの点検等に取り組んできた。 しかし、担当から活動を提案することがほとんどだったため、今年度は子どもたちが自分たちで活動を創り出して取り組むようにしたいと思い、My project を設定した。

実践１「自らの課題意識に基づく活動の選定とチームごとの活動計画作り」

具体的な実践内容

≪主体性≫

・４月の委員会で年間目標を決定
第１回委員会で今年度の年間目標を策定するにあたり、どんな学校にしたいかをフリートークで出し合う。その後、出された意見で共通するものを手がかりに年間目標を決定する。

・目標達成に向けた活動を話し合い、チームを選定する。
決定した年間目標を達成するために、委員会ではどんな活動に取り組むべきか、自分はどんな活動をしたいかを話し合う。また、必要に応じてプロジェクトチームを作る。

・各チームでリーダーを決め、具体的な計画を立てる。
各自の希望をもとに、３～４名ずつで５・６年合同のチームを編成し、チームごとにリーダーを決める。そして、チームごとに活動計画を立て、日常的にどんな活動を行うのか、全校児童に呼びかける内容等を話し合う。それらを基に、以後活動していく。

○成果
○どんな学校にしたいかを出し合う中で、活動のイメージを共有することができた。
○自分が取り組みたい活動に参加することで、意欲的に活動する児童が多い。

●課題
●決められた活動はきちんと行うが、それ以外の活動を豊かに創造するまでには至っていない。

実践２「環境を守る活動へのチームごとの取り組み」

具体的な実践内容

≪協働性≫
チームごとに活動計画に沿って取り組む。各チームの取組は、以下の通りである。

・小動物の世話
本校では、ウサギ２羽、鳥骨鶏３羽を飼育している。そこで、日常活動として、昼休みに飼育小屋の清掃や餌やりや水替えを行う。また、校内放送で餌の持ち寄りの呼びかけや、餌を持って来てくれた児童の紹介を行い、全校児童に関心を持たせる。餌を持ってきた児童へは、手作りのしおりを渡す。

・トイレットペーパーや手洗い石鹸の補充、スリッパ点検
昼休みに各階のトイレや手洗い場を巡り、トイレットペーパーや手洗い石鹸の補充を行う。その際に、トイレのスリッパが並んでいるか、正しくトイレが使われているかを点検し、翌日の校内放送で全校児童に呼びかけを行う。そうすることで、みんなが気持ちよくトイレや手洗い場を使えるように意識付けを行う。

・廃食油の回収
家庭から出る廃食油からバイオディーゼル燃料を作ることで、地球温暖化防止につながる運動「荒尾エコプロジェクト」に参加し、全校児童と保護者に廃食油回収を呼びかける。集まった廃食油は、リレーセンターへ届ける。

・紙リサイクル
各クラスから出る紙ごみを減らすために、リサイクルボックスを設置し、紙類の回収を行う。回収した紙類は、紐でくくり、資源ごみとしてリサイクルに出す。

・その他
荒尾市の「みどりのバトンパス事業」に参加し、花苗を２００本いただく。それを各クラスに配付したり、花苗を植える準備を手伝ったりする。また、夏場の児童散水に使ったホースの片づけや清掃を行い、来年度に使えるよう片付ける。

○成果
○自分たちで決めた活動なので、協力して取り組む姿が多く見られた。また、全校児童に呼びかけることで、全校児童の意識を高めることにもつながった。
○各チームで環境・保健委員会クイズを作り、委員会の活動を紹介することができた。

●課題
●常時活動が少ないチームがあり、意欲を行動へつなげられない面もあった。

実践３「活動を振り返る時間の設定」

具体的な実践内容

≪自律性≫

・振り返りカードの記入と活動内容の交流
委員会終了時に振り返りカードに記入し、その日の活動の成果と課題を確認する。また、各チームの活動を交流することで、他のチームの頑張りも共有する。

・委員会前の活動内容の検討
委員会活動の前に、委員長と「何を話し合うのか」「どんな活動に取り組むのか」などを共有する。委員長を中心に、自分たちで委員会を運営する意識を高める。

○成果
○活動後に振り返りを行うことで、自分たちが行った活動を価値付けることができた。
○委員長や副委員長が意欲的に委員会の運営に携わることができた。

●課題
●各チームの活動量にばらつきがあり、振り返りの時間を十分に確保できないチームもあった。

本年度の実践を振り返って

【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】
委員長のＢさんの振り返りには以下のような内容が書かれていた。
４月「それぞれの係を決めました！！みんなで協力して頑張りたいです。」５月「それぞれの係の仕事をしました。自分の仕事もしながら、みんなのサポートもしたいです。」６月「児童集会の発表に向けて、それぞれの仕事の原稿を作ったり、写真をとったりしました！！発表をがんばりたいです。」１１月「綺麗な花と美味しい野菜ができる準備をしました。みんなで分担して活動しました！！」と記述していた。
Ｂさんは、４月に決めた自分のめあてを「みんなを引っ張る！」にしていた。委員長としての責任を自覚して、最後まで頑張る姿が多く見られた。

【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的）】
・委員長の自覚の高まりが見られ、委員会活動の前には、どんな活動内容にするかの話し合いを持った。自主性と責任感の向上を感じた。
・チームで協力して、真面目に活動に取り組む姿が見られた。チーム内では、分担してそれぞれの役割を協力しながら達成していた。
・子どもたちは意欲を持って委員会活動に取り組んでいたが、もっと活動内容を広げる手立てを工夫できれば良かった。

【資料 22　村上正順講師の実践の記録】

カ　徳永朝美教諭の実践【資料 23】

My project	みんなが楽しく過ごせる学校づくり（いじめ０）
My project 設定の理由	生徒指導を担当して２年目になり、昨年と同様に、みんなが楽しく学校生活を過ごしてほしいという願いより、My project を「みんなが楽しく過ごせる学校づくり（いじめ）」とした。子どもたちの変化に早めに気付くとともに、気付きにくい変化を見逃さないようにしたい。

実践１「八幡っ子アンケートの実施」

具体的な実践内容

≪主体性、自律性≫

毎月、「八幡っ子アンケート」を行い、子どもたちの悩みや気持ちに寄り添えるようにする。日々の生活態度では気付けない、悩みなどを早期発見する。

また、アンケートの結果をもとに、本人とじっくり向き合って話をし、悩みなどを聞くことで、学級全体の様子も把握できるようにする。

○成果 ●課題

○児童の悩みにいち早く気付くことができ、早期に対応することで問題解決に繋がった。

○みんなで共有した方がよいことは、担任より全職員に報告してもらったことで、他の学年の先生とも共有できた。

●依然として、学級の問題は担任の仕事だという認識が強く、共有したり話し合ったりする機会が少なかった。

●問題が起こった後の聞き取りはできるが、いじめ０につながる活動があまりできていない。

4年1組
【結果】
- 話を聞いた児童　6人
- 共有が必要な児童　0人

（内容）
- 友達から嫌なことを言われた。
- 相手は冗談のつもりかもしれないけど、自分はされるのが嫌だ。

実践２「問題を先生方と共有する」

具体的な実践内容

≪協働性、自律性≫

各学年で起きた問題や、各階で起きたことなど、担任だけで問題解決するのではなく、学校全体の問題として全職員で共有する。

ロイロノートを活用し、全学年の先生方に知ってもらうことで、他の学年の児童にも話をし、学校全体の問題として改善を図っていく。

荒尾市の小中高の生徒指導主任が一堂に会する「若草会」などで取り上げられた問題や、今、荒尾市で多くなっている問題などを先生方と共有し、「自分の学級や八幡小ではどうか。」と立ち止まって考える機会とする。また、荒尾警察署からの注意なども、先生方と共有し、子ども達に関係することであれば、各学級で話をする。

生徒指導より連絡です。
【ゴミ捨てについて】
ゴミ捨てに関する事案が2件あがっています。１つ目は、児童の家の駐車場にお菓子のゴミが捨ててあるということです。もう一つは、団地の家の前にお菓子のゴミが捨ててあるとの事でした。
お菓子を食べた後のゴミの処理の仕方について、各クラスで指導をお願いします。
子供達の意識を変えるためには、日頃の学校での生活も重要だと思います。
教室や廊下などにゴミや物が落ちていないか、落ちていたら拾うということが自然にできるよう、声かけをお願いします。
私たち職員も、整理整頓ができているか、もう一度見直していきましょう。机の上や棚などに物を置かないよう、みんなで意識していきましょう。

○成果 ●課題

○起きた問題について、全学年で共有することで、先生方で話し合う場面ができたり、管理職と今後の進め方などを話したりでき、早い解決に繋がった。

●担当からの注意が多くなり、先生方からの聞き取りが少なかった。各クラスの様子や、細かい問題などの話を聞く場面を増やしていきたい。

実践３「各クラスでの良いところ発表」

具体的な実践内容

≪協働性≫

全学級、友だちの良いところを発表したり、学級で共有したりする活動を行う。

【１年生】キラキラタイム
【２年生】教室後方の掲示物
【３年生】友達を褒め合う活動
【４年生】きらりさん発表
【５年生】キラキラタイム＋
【６年生】きらりさん発表
【なでしこ学級】頑張り発表

（２年生の掲示）

（４年生のきらりさん）

○成果 ●課題

○普段の生活の中でも、進んで友だちの良いところを見つけようという気持ちをもって過ごす様子が見られた。

○心のアンケートの結果から、友達に褒められる経験によって、多くの子どもたちの自己肯定感が高まったことを確認できた。

●各学級の先生方がどのような活動を行っているのか、把握していない学年もあった。

本年度の実践を振り返って

【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】

先生方が職員室で児童の様子を話す場面や、児童の対応で悩んでいる先生が、気負わずに相談したり、相談に乗ったりする様子が多く見られるようになった。My project 達成に向けた取組が、風通しの良い職員室の雰囲気づくりに貢献できたように思う。

また、先生方が子どもたちの良いところを発表したり、学級で共有したりする取組を継続して行ったことで、子どもたちの自己肯定感が高まり、楽しく学校生活を送る姿をあちこちで目にするようになった。さらに、その姿を職員室で話題に上げる先生方の様子も見られた。問題行動やトラブル等のマイナスな面だけでなく、子どもたちのプラスの面に目を向けていこうとする職員の雰囲気づくりにつながった。

【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的】

子ども達の「いじめ０」に向けて、先生方と協力して活動することで、各学級での問題行動やトラブル等も減り、学校全体が４月当初よりも落ち着いている。

問題が起こってから対応することも大切だが、起きる前にクラスの実態を把握することや、子ども達と日常的に会話することなども、子どもたちの変化に早めに気付くとともに、気付きにくい変化を見逃さないようにするためには重要である。

また、職員同士の意思疎通を大切にすることで、子ども達の自己肯定感の向上にもつなげることができた。

【資料 23　徳永朝美教諭の実践の記録】

キ　中村界斗教諭の実践【資料 24】

My project	委員会と連携して、児童の運動に対する意識を向上させる。
My project 設定の理由	近年では、子どもたちの基礎体力の低下や、運動機会・運動量の二極化が問題視されている。また、新型コロナウイルスの影響で生活様式も大きく変化し、子どもたちの運動機会だけでなく、運動やスポーツへの関心も低下しているように感じる。 また、本校では児童会の「体育委員会」がなくなり、別委員会と抱き合わせの形をとっており、児童主体の体育的行事が少ない傾向がある。 そこで、本年度は体育主任として「委員会と連携して、児童の運動に対する意識を向上させる」ことを目指し取り組むこととした。そして、それを達成することが、学校目標の達成につながると考えた。
実践１　「体育用品や倉庫等、環境の整備」	
具体的な 実践内容	≪主体性、自律性≫ 年度当初にすべきこととして、体育用品や倉庫の整理を行った。昨年度以前から使っていない用品は廃棄したり、よく使われる用品は整理して使いやすい場所に配置したりするなど工夫した。 また、その時期に使われる用具は、児童玄関や職員室に近いところに設置し、使いやすく休み時間等も児童に貸し出すことができるようにした。 さらに、外の体育倉庫だけでなく、体育館内の倉庫も整理することを心がけた。特に体育館には「テニピン」用のネットを作成し、いつでも授業で活用できるようにした。
○成果 ●課題	○その時期に使う道具を出しておくことで、体育の授業の際もスムーズに準備ができた。 ○休み時間や放課後に子どもたちが道具を借りて、進んで練習する機会が増えた。 ●基本的に自分の仕事として行うことが多く、子どもたちと連携することができなかった。 ●整理整頓された体育倉庫の状態を、自分だけの力で保つことは難しいと感じた。
実践２　「児童主体の運動会」	
具体的な 実践内容	≪主体性、協働性≫ 昨年度と同様に児童主体の運動会を行った。昨年度以上に子どもたちができることは子どもたちに任せ、活躍の場を多くできるように工夫した。 競技の練習に関しては、子どもたちが先生の踊りを見て真似して踊ったり、先生が決めた振付などをそのまま模倣させたりするのではなく、子どもたちが互いに教え合ったり、考えたりできる機会をつくるように先生方にお願いをした。 運営面に関しては、スローガンの作成や、応援練習、団旗の作成等、本番以前から児童と協力して準備を進めた。前日準備及び、本番の仕事に関しても、これまで職員のみで行っていたことを、子どもたちと一緒に進めることにした。
○成果 ●課題	○子どもたちが活躍する場が増え、子どもたちを褒める機会も増えた。「自分たちで創り上げた」という達成感を感じている児童が多くいた。 ○委員会としての働きも活性化することができた。 ●先生方との連携、均等な役割分担については、改善の余地がある。
実践３「委員会主体のランニングタイム」	
具体的な 実践内容	≪自律性≫ 本年度は「絆リレーマラソン」を実施しないことが昨年度の時点で決まっていたことにより、子どもたちの体力向上につながる機会が少なくなった。 そこで、ランニングタイムを委員会主体で企画することにした。実施期間や方法など、具体的なことは委員会の子どもたちが主体となって企画した。 実施期間は１月から２月になったため、今は実施予定の段階だが、企画や準備は整っている。
○成果 ●課題	○「絆リレーマラソン」に代わって子どもたちの運動機会を確保することができる。 ○授業時間を使わないため、先生方の負担も軽減できる。 ○事前の呼びかけや、放送、記録カードの作成、実施中に流す音楽の準備等を自分たちで考えながら進める様子が見られた。 ●自主的な参加を促すため、必ずしも全児童の運動機会を保証するものではない。 ●「絆リレーマラソン」と比べて実施時間が短く、参加意欲を促す目標設定が難しい。
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 子どもたちの振り返りの中で、「自分たちの力で運動会を作り上げることができた。リーダーとして引っ張ることができた。」「自分たちで企画を考えたり、委員会の活動を進めたりすることができた。」というものがあった。 昨年度から、子どもたちの主体的な活動場面が増えていることは、言うまでもなく、その姿にチームで協力することや、責任をもってやり遂げることへの意識の高まりが見えてきた。自分だけではできないことも、子どもたちと共に作り上げていくという意識が、これから一層必要になっていくことを改めて実感した。 **【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的）】** 昨年度からの２年間、本校の体育主任を任されているが、すべきことを、どのように工夫して行っていくかという考え方で校務にあたってきた。しかし、持久走大会や、それに代わるリレーマラソンも行事としてなくなったり、体育委員会自体がなくなったりするなど、「すべきこと」の仕事が減ってきた。そのことで改めて、自分が校務分掌を通して何ができるか、子どもたちとともに何を創り上げられるかを考えるようになった。 来年度は、今の自分と子どもたちにできることを進んで見つけ、継続して取り組むことができるものを、学校全体のために生み出していきたい。 	

【資料 24　中村界斗教諭の実践の記録】

ク　平島勇太教諭の実践【資料 25】

My project	① みんなのためになる教務主任としての仕事の在り方 ② ６年生児童を中心に取り組む特別活動等の活性化
My project 設定の理由	・学校教育目標の達成に向けて、限られた時間の中で最大限の効果を生み出せるような工夫をしていく必要性があると考えたから。

実践１　教務主任としての仕事の在り方【教務】

具体的な実践内容	≪主体性、協働性、自律性≫ ・デジタル職員室に全ての連絡事項を貼付 ・週１回の連絡会の内容も共有ノートに貼付 ・１カ月先までの教務通信の貼付 ・時数集計表の修正　・通知表と指導要録の関連 ・校内研修後の事務整理等の時間（60 分）の確保 ・午前中５時間日課、５時間授業日の設定 ・地域素材を活用した学習の設定 ・事前資料配付(職員会議、見つめる会等) ・集会の際に視覚的に理解を促す資料の作成 ・次年度構想会議の実施　・特別日課表の工夫(準備時間、休憩時間も明記)
○成果 ●課題	○全ての職員が情報を共有　○ペーパーレス化　○業務の効率化 ○時数の確保及び学級事務の時間の確保　　○職員の意見を学校運営に反映 ○教育課程の適切な実施を把握、助言、修正 ○勤務時間を意識した働き方　　○退勤時刻の改善

実践２　「６年生児童を中心に取り組む特別活動等の活性化」

具体的な実践内容	≪主体性、協働性、自律性≫ ・学校行事や集会への児童の主体的な参画（新入生歓迎会、運動会、親睦陸上大会など） ・委員長・クラブ長による進行表の作成、職員と確認 ・他校との交流（万田小・茨城県中央小・長崎県諏訪小）
○成果 ●課題	○児童の主体性や協働性等の高まりには非常に効果があった。

本年度の実践を振り返って

【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】

・実践１について、本校職員から以下のような声が聞かれた。

- ・年度末に来年度の見学旅行の期日やバス会社まで決めることができていたので、４月の担任発表後に慌てて見学旅行関係の仕事をする必要がなく、余裕をもって準備ができた。
- ・週予定を早めに共有ノートに載せてあるおかげで、見通しをもって教育活動の計画を立てることができた。また、他学年の学級通信を見ることができるため、作成する際の参考になり、連絡事項の漏れを防ぐとともに時短にも効果的だった。
- ・連絡会などの情報を載せてあるため、支援員である私たちも共通理解を図ることができた。
- ・時数集計表が修正されたことで、達成率を見て、「この教科が少ないな」と一目で分かり、時間割作成に生かしやすかった。また、特別支援学級の時数集計表も修正したことで、自立活動等の適切な実施を管理職の先生方とも確認しやすくなった。
- ・５時間授業が多く設定してあることで、放課後の時間で様々な学級事務等をすることができた。

・実践２について、児童の振り返りには以下のような記述が見られた。

- ・学校運営協議会では、地域の方と相談しながら、自分たちにできることを考えることができてとてもいい機会になった。
- ・万田小の６年生と会うのは、風流ガイドも含めて２回目ですが、自己紹介をし合ったり話したりするなど、前よりも仲が深まった感じがして嬉しかったです！！同じ荒尾市の６年生同士で、世界文化遺産についてガイドし合うことで地域の文化を広めているということを改めて感じ、嬉しい気持ちになった。
- ・諏訪小の体育館に行くと、すぐ地域のお祭りである「長崎くんち」で披露する「蛇踊り」を見せてくれた。フレンドリーに接してくれて、とても話しやすかった。同じ世界文化遺産を紹介している６年生で交流ができて嬉しかった。

【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的】

実践１についての観察

・教職員の退勤時刻は、以前よりも早くなっている。

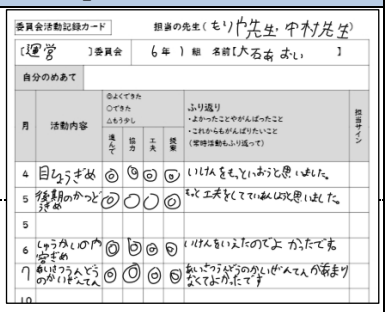
・年間たくさんの地域人材や地域素材を活用した学習を行うことができ、児童の地域を愛する気持ちも高まってきていると感じている。

実践２についての観察

・児童会リーダーを中心に６年生全員が取組の目的を理解し、協力し合いながら準備や運営をするなど、活躍する場面がたくさんあった。それらの経験により、主体性や協働性が確実に高まったと感じている。

【資料 25　平島勇太教諭の実践の記録】

ケ　守屋数人教諭の実践【資料 26】

My project	運営・体育委員会の活性化
My project 設定の理由	学校で生じる課題や日々の生活で起こりえる問題に対して、主体的に考え、自ら解決に向けて行動できる力は、これからの社会で求められる重要な力である。 しかし現状として、与えられた課題に対して受け身の姿勢になったり、自分の考えを持つ前に、周囲に迎合してしまったりする児童の姿も見られる。 そこで、子どもたちが学校生活の中で「自分だったらどうするか」と主体的に考え、仲間と意見を交わしながらよりよい方法を見出す経験を積むことが必要であると考えた。自ら課題を見つけ、見通しをもち、行動に移し、振り返るという一連の学びを通して、問題解決力と主体性を育成することを目的として、My project を設定した。
実践１「全員が見通しをもち委員会に参画するために」	
具体的な 実践内容	≪主体性、自律性≫ 運営・体育委員会では、全員が見通しを持ち参画できるようにするために、月に１度行われる委員会活動の１週間前から議題を共有し、当日までに全員が自分の考えや意見を一つ以上持っておくことで、全員が主体的に学校の運営について話し合うことができるようにした。  委員会活動記録カード　担当の先生（もり先生・中村先生） 〔運営〕委員会　6年 ）組　名前〔大石あおい〕 自分のめあて ○よくできた　○できた　△もう少し ふり返り　・よかったことやがんばったこと　・これからもがんばりたいこと（実時活動もふり返って） 月　活動内容　進んで　協力　工夫　授業　担当サイン 4　目とうぎめ　◎　◎　◎　◎　いろいろなもっていおうと思いました。 5　後期のかっどうぎめ　◎　○　○　◎　もっと工夫をしてていきたいと思いました。 5 6　しゅう会しの内容ぎめ　◎　◎　◎　◎　いけんをいえたのでよかったです。 7　あいさつうんどうのやくわりをえん　◎　◎　◎　◎　あいさつうんどうのかいぜんでんが高まりよかったとおもいます。 10
○成果 ●課題	○一週間前に、当日の議題を共有しておくことで、当日の話し合いの際に、一人ひとりの発言量が増えた。 ○児童の振り返りシートへの記述内容からも、主体性の高まりを感じ取ることができた。 ●一人一人の発言量は増えたが、発言内容の質が伴っていない場合がある。 ●依然として、全員が見通しをもてているとは言えず、手立てに改善が必要だと感じた。
実践２「主体的・協働的に活動を」	
具体的な 実践内容	≪主体性、協働性≫ **学年間遊び活動** 学年ごとに遊びを企画・運営し、異学年の児童同士が協力し合って楽しめる環境を整える。本活動では、上級生が下級生をリードする場面が生まれることを想定した。 **あいさつ運動** 児童が登校してくる朝の時間に、靴箱前であいさつ運動を行い、積極的なあいさつを運営・体育委員会の児童が率先して実施する場面を設ける。また、給食時間の校内放送で、あいさつが特に良かった児童を紹介する。これにより、あいさつをする意欲を高め、学校全体であいさつが当たり前になる環境づくりを図る。 **募金活動** 児童が主体となって募金活動を推進する。活動を通して、社会奉仕の意義や、自分が社会の一員として貢献できる存在であることを理解する機会を提供した。
○成果 ●課題	○学年間遊び活動では、異学年の児童間で対話を楽しんだり協力したりする姿が多く見られ、学年をまたいで一層繋がりを深めることができたように思う。 ○あいさつ運動では、「元気なあいさつ」「進んであいさつ」を行う児童が増えた。運営・体育委員会の児童からも「自分から挨拶する人が増えた。」という感想が得られた。 ○募金活動では、多くの児童が積極的に参加し、「なぜ募金をするのか」といった活動の意義を友達同士で話し合う様子も見られた。
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ　間接×質的）】 月に１度行う委員会活動における児童の振り返りシートには、「これからも提案を言えるように頑張る。」や「今日は意見が言えたから良かったです。」「アイディアをいっぱい出した。」などの記述が多く見られ、主体的に取り組もうとする様子が伺えた。 これらのことから、委員会活動の１週間前に内容を確認したり、自分たちで活動を決めたりすることが、委員会活動を活性化させることにつながった。こうした取組が、子どもたちの主体性・協働性・自律性の伸びにもつながったように思う。 **【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ　直接×質的】** 年度当初の委員会活動では、委員長やその他の６年生の発言だけで議論が進んでいた。しかし、上記の手立てや取組を通して、全員が活動への見通しを持つようになり、全員参画の委員会が成り立つようになった。議論の深まりに課題が残る面をあるが、教師が問い返したり、途中で論点を整理したり、助言をしたりすることで、子どもたちが主体性を失うことなく、一層質の高い議論ができるようにしていく必要がある。	

【資料 26　守屋数人教諭の実践の記録】

コ　上野緩実養護教諭の実践【資料 27】

My project	健康な生活を送る基礎を培うこと。意識化行動化
My project 設定の理由	子どもたちが生涯にわたって、自分の健康状態に応じてある程度の心も体も健康な生活を送ることができれば、予測困難な時代もどうにか生き抜けるのではないかと思う。 しかし、子どもや保護者の健康に関する意識は高いとは言えない。自分の心身の健康（生活習慣だけでなく、基礎疾患やアレルギー、メンタルヘルス等も含む）に関心をもち、自分の心身の健康の状態を知り、自分の心身の健康状態に合わせて健康な生活を送ることを、子どもだけで実践することは難しい。 しかし、学習も活動も自分の健康が基盤になる。小学生期に、大人や仲間と健康的な生活づくりに取り組むことで、自分の健康を意識し、将来の行動につながると考えた。
実践１　「日々の学校での子どもと養護教諭の関わり」	
具体的な 実践内容	≪協働性≫ ・朝の担任による健康観察の結果は、タブレットで確認できる。タイムリーに確認を行いながら健康観察が行われていない学級には直接児童の出欠確認に行くようにする。 ・できるだけ頻繁に校内環境巡回をしながら、児童の授業の様子や健康状態を確認し、表情や顔色をみて言葉をかけるようにする。 ・保健室に来室する児童には、「ほけんしつりようカード」は持参してもらうようにする。来室した児童が、担任と自分のけがや体調不良について話をしてもらう時間をつくるようにし、児童にも担任にも意識をもってもらうようにする。 ・来室児童が教室へ戻る際には、養護教諭が一緒に教室へ行くようにし、子どもと話す時間を確保する。また、その際に他の児童の様子を確認し、必要に応じて言葉をかけるようにする。 ・保健室で気になる児童については、関わりのある職員や管理職と共有し対応する。必要に応じてＳＣへつないだり、全職員で共有したりする。 ・健康面で配慮が必要な児童については、全職員で共通理解を図りつつ、緊急時の対応については職員だけでなく、児童にも SOS カードを活用した「きんきゅうのかくにん」について担任を通して指導をしてもらう。また、意識化を図るために「きんきゅうのかくにん」は教室に掲示する。
○成果 ●課題	○こまめに児童の観察を行い、言葉をかけることで、児童自身が自分の健康について考えることができるようにした。 ○健康観察や保健室来室時に、担任を含めた全ての職員が児童の健康を意識することができていた。児童も安心感を持って学校生活を送ることができていると思う。 ○基礎疾患をもつ児童が発作を起こした際には、クラスメイトも自分の役割を自覚して発作を起こした時刻を見たり、保健室に呼びにきたりするなど、行動化できているクラスもある。 ●健康面で配慮が必要な児童については、緊急時の対応がある児童とない児童がいるため、個別のマニュアルも作成したい。 ●今年度からの取組「ほけんしつりようカード」や「ＳＯＳカード」の活用の定着が不十分である。
実践２　「保健指導や掲示物・ほけんだより・勧告書等の啓発活動」	
具体的な 実践内容	≪主体性、自律性≫ ・毎月児童の健康に関連したものを掲示し、自分の健康との関連を持てるようにする。また、保健室は各教室から離れたところに位置しているため、来室しない児童も日常的に目にすることができるように、各フロアにも掲示をする。 ・学校集会では、全学年を対象に保健指導を行う。 ・身体測定時には、各学年に応じて保健指導を行う。 ・宿泊行事前には、健康調査を行った後、個別で健康面談を行い、保護者にも確認表を見ていただく形式に変更する。 ・１年生の学活の時間には、歯の大切さについて歯みがき保健指導を行う。 ・健康診断後の受診が必要な児童については、勧告書だけでなく、教育面談時に担任から直接健康診断結果を配付してもらい、併せて受診を勧めてもらう。 ・医療機関での治療や相談を促すため勧告書だけでなく、「受診のすすめ」や「ほけんだより」でも複数回受診を勧める。
○成果 ●課題	○多くの場所に健康に関する掲示をしたことで、日常的に目で見て意識化を図る環境をつくることができた。また、多くの児童が掲示物を見るために足を止める様子が見られた。 ●保健指導の効果が継続しないことが多い。繰り返し指導し意識させ、行動化につなげていく必要がある。
実践３　「環境・保健委員会活動」	
具体的な 実践内容	≪主体性、協働性、自律性≫ ・環境・保健委員会の中で保健の常時活動を実施している。そのメンバーの中から希望する児童で健康推進チームをつくり、学校の健康に関する話し合いや活動を行う。学校の健康に関することを主導してもらい、児童から児童への活動を行う。 ・９月の委員会活動の時間に、八幡小の健康についての話し合いを行う。 ・夏休み明けからは、熱中症予防のための放送を行う。暑さ指数やそれに応じた昼休みの過ごし方について毎日放送をする。 ・学校における健康的な生活についての話や健康クイズなどの健康放送を、火曜・水曜・金曜の給食時間中に行う。 ・学校における基本的生活習慣の定着のために、不定期にハンカチ・ティッシュの携帯や、歯ブラシ・歯みがきチェック等を行う。また、その結果を放送する。 ・職員にもアンケートを実施し、先生方が健康への意識を高める機会となるようにする。
○成果 ●課題	○環境・保健委員会の健康推進チームのメンバーは高い意識をもち役割を果たしていた。その日の暑さ指数によって昼休みの遊び方や遊ぶ場所が変わることから、健康推進チームは、適時、運動場や体育館に設置している暑さ指数計を見て呼びかけを行った。他の児童も遊び方について考えている様子が見られた。 ●高学年として多くの行事に向けた取組や活動がある中、環境・保健委員会では美化や飼育・保健といった常時活動を担い、学校全体の健康に関わる取組を進めている。その取組を職員がサポートしているものの、児童や職員の負担は大きい。 ●児童の健康行動の実態と先生方の意識には差があるように感じた。
本年度の実践を振り返って	
【学習者による自分の学びについての記述（タイプⅠ 間接×質的）】 児童の振り返りシートの記述内容や、日常生活の中での児童のやり取りの内容には、次のようなものがあった。 ・振り返りのシートからは、「進んで発表の原稿を自分なりの言葉にできました。」「進んで提案することができました。」「５・６年生で協力して進んで活動することができました。」などの振り返りがあった。 ・日常生活の中でも、環境委員会の児童が「今日は朝から天気予報を見てきました。今日は外で遊べませんね。」「６年男子に歯磨きをしている人が増えています。」「帽子を被っていない人がいたから声をかけました。」など、健康面についての話をすることもあった。 これらの内容からも、これまでの取組が、健康な生活を送るための意識化や行動化に繋がっていることを実感できた。 【パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等（タイプⅣ 直接×質的）】 ・学校の健康に関することを主導する健康推進チームの児童は、健康面に関する課題を児童目線でよく理解しており、課題解決のための取組のアイディアも多く出していた。日常的に健康についての課題を伝えてくれ、一緒に考える機会があった。取組を進めるにつれて、自分たちで考えて行動する場面が見られた。 ・職員の意識には個人差があるものの、児童は担任に健康面でも気にかけてもらっているという安心感があり、落ち着いて学校生活を送っている子もいる。 ・取組を進めているものの、早寝・早起き・朝ごはんといった基本的な生活習慣や、学校でのハンカチ・ティッシュの携帯、歯みがきなどの生活習慣の定着には、依然として課題がある。 ・健康診断の結果を踏まえ、医療機関での相談や治療が必要な家庭にはお知らせをしているが、生活に余裕がない家庭も多く、受診まで至るのは半数ほどである。しかし、受診率は少しずつ上昇しており、令和５年度 34.8%、令和６年度 51.3%、令和７年度（12 月１日現在）51.1%となっている。	

【資料 27　上野緩実養護教諭の実践の記録】

（３）日々の授業及びプロジェクトの質的改善のために

ア　研究推進便りの発行

本研究を推進するにあたり、各教師の取組が孤立することを懸念した。そこで、取組の状況を全職員で共有できるよう、研究推進便り「まなびや」を発行することにした【資料 28】。公開授業後には、授業を参観して感じたことや大切にしたい視点を、一般化した形でまとめて掲載した。また、授業動画を QR コード化して掲載することで、各自のタブレットでも授業の様子を視聴できるように工夫した。研究推進便りの発行により、１回の公開授業を、授業参観→座談会→研究推進便りの３段階で捉え、学びを一層深めることができると考えた。また、掲載内容は公開授業に関するものだけでなく、特別支援教育や学級経営など、多様な実践にも広げた。研究推進便りを読むことが、先生方にとって「教師としての在り方」を見つめ直すきっかけとなるよう、発行のタイミングや共有すべき内容について熟慮しながら発信した。

【資料 28　研究推進便り】

イ　自主研修会の開催

全員参加の公的な校内研修とは別に、時間の都合がつく職員が、必要に応じて自由に参加できる自主研修会を開催した。研修テーマは、その時々の学校の状況を踏まえて設定したり、職員が講師となって自身の実践を紹介したりする形をとった。自主研修会では、新たな知識の獲得や技術の習得に加え、少人数での対話を重ねることによって、同僚性の醸成にもつながると考えた【資料 29・30】。

第１回	体験から始める、教師のための生成 AI 活用術 （ファーストステップ編）
第２回	「あらおベーシック」に学ぶ ～１年生道徳授業の実践から見える工夫～
第３回	図工の引き出しをいっしょに ふやしませんか？
第４回	Benesse ミライシードの使い方講座
第５回	これまでの歩み、これから

【資料 29　自主研修会のテーマ】

【資料 30　自主研修会の様子】

５　成果と課題（○成果　●課題）

（１）取組１「My mission（質的改善を図るべき授業の課題）」について

ア　学習者による自分の学びについての記述より（タイプⅠ　間接×質的）

○本研究の目的である主体性・協働性・自律性の育成という観点から、各教職員が提出した「研究のまとめ」に記された児童の振り返りを横断的に分析したところ、日々の授業改善が児童全体の学びに確かな変容をもたらしていることが明らかになった。年度当初は、「～がわかりました。」「～をがんばりました。」といった結果だけを述べる記述が多かったが、研究を進めるにつれ、「○○さんの説明がわかりやすかった。」「△△さんの意見を聞いて考えが変わった。」「わからなくて困っていた友達にやり方を教えた。」など、友達との関わりの中で学びを広げたり深めたりする具体的な記述が増えていった。これらの変化は、主体的に学びへ向かう姿だけでなく、友達と互いに支え合う協働的な学びの成立、さらには見通しをもって粘り強く解決に向かう自律性の育成が、児童自身の言葉によって裏付けられたものであると言える。また、「キーワードがあることで考えが発表しやすい」「困ったときにいつでも質問できて良かった」といった学習過程に対する言及や、「休み時間に自分から話しかけられるようになった」「これまで話したことがなかった友達とも話すようになった」など、教室外での人間関係の変容を記す振り返りも複数見られ、授業改善が学校生活全体の対話の質にも好影響を与えていることが確認できた。これらの児童の具体的な言葉は、本研究における資質・能力の育成の成果を直接的に示している。

●児童の振り返りを通して資質・能力の育ちを読み取る際の視点や評価観が教職員間で十分に共有されていない点が課題として挙げられる。実際に、振り返りが結果の列挙に留まり、思考の過程や友達との関わりを書ききれない児童もおり、資質・能力の観点に沿って「どの力がどのように伸びたのか」を自覚的に記述する段階には至っていない児童も見られた。今後は、児童が資質・能力を意識して学びを言語化できるよう、振り返りの際の問いの設定や教師の働きかけを改善するとともに、振り返りを評価する枠組みについて校内で共通理解を図る必要がある。

イ　児童アンケート結果より（タイプⅡ　間接×量的）

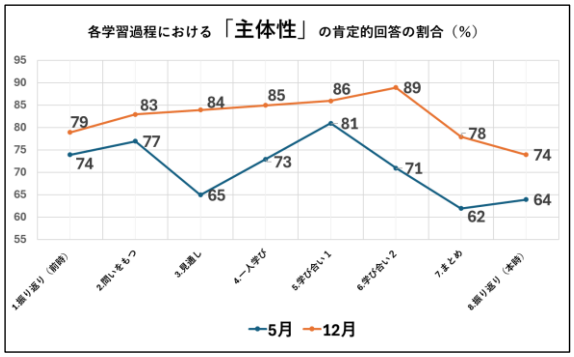
○どの学習過程においても、全ての資質・能力で数値が向上している。これは、教師が自身の授業課題の克服に向け日々授業改善に取り組んできた成果が、児童の学びの実態として数値に明確に表れていることを示している。

●協働性の「学び合い１」と自律性の「学び合い２」では、数値がほとんど上昇しておらず、協働的・自律的に学びを広げたり深めたりする力が十分に定着していないことが課題として明らかとなった。これは、教師が授業デザインや指導方法にさら

なる工夫や改善の余地を残していることを示しており、今後は児童が互いの考えを統合・深化させたり、粘り強く考察したりできる学習過程に、一層効果的な手立てを導入することが求められる。

（ア）主体性【資料 31】

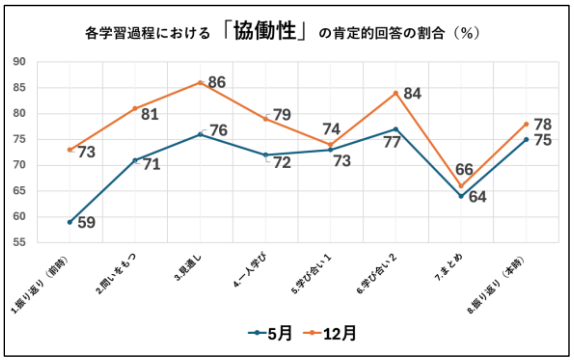
○「見通し」（+19）や「まとめ」（+16）の大幅な向上から、児童が学習の道筋を自ら描きながら課題解決に向かう主体的な思考が育成されたといえる。また、見通しをもてるようになったことが、「一人学び」（+12）への意欲を高める基盤となり、「学び合い②」（+18）においても、自らめあてに立ち返りながら進んで考えを深めようとする姿につながったと言える。



【資料 31　各学習過程における「主体性」の肯定的回答の割合】

（イ）協働性【資料 32】

○「見通し」（+10）や「問いをもつ」（+10）の改善から、友達との対話を通して課題の解決策や学習の道筋を明確にしようとする協働的態度が育まれたと言える。友達と意見を交流し、互いの考えを結びつけて学習を進める前向きな協働の姿が定着しつつある。

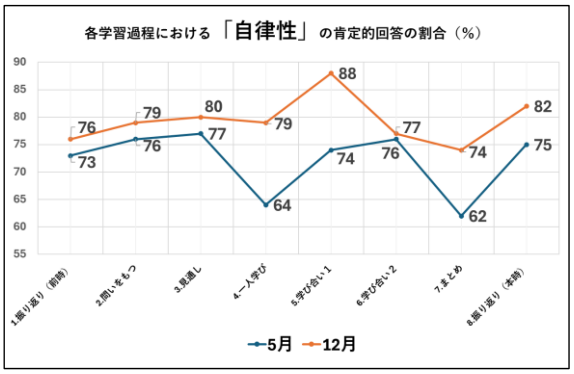


【資料 32　各学習過程における「協働性」の肯定的回答の割合】

○学び合い②（+7）の伸びから、友達と出し合った考えを基に、めあてに立ち返りながら考えを共有し、共に学びを深めようとする姿勢が向上したと言える。

（ウ）自律性【資料 33】

○「一人学び」（+15）の向上から、課題に最後まで粘り強く取り組み、自分の考えを丁寧に整理・構成しようとする姿が育成された。見通しをもって学習を進めることで、途中で諦めず思考し続ける態度が定着しつつある。



【資料 33　各学習過程における「自律性」の肯定的回答の割合】

○学び合い①（+14）及び「まとめ」（+12）の向上から、友達に自分の考えを理解してもらうために粘り強く説明したり、友達の考えを理解しようと努めたりする自律的な姿が増加したと言える。

ウ　パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等より（タイプⅣ 直接×質的）

○各教職員の「研究まとめ」を横断的に分析した結果、４月当初と比べて、児童の学

びの姿が「My mission で掲げた理想の児童像に確実に近づいている」という共通した認識が見られた。例えば、「全員が参加する話合い」「見通しをもった自力解決」「問いを生み出す姿」など、それぞれ焦点は異なるものの、どの教師の記述にも、授業中の具体的な児童の行動変容が根拠として示されていた。特に、児童が自分の考えた過程を、発言や行動として示す場面（友達への質問、根拠の説明、考えの練り直し、手立ての選択等）が増えた点は、複数の教師が共通して報告している。

●各教職員の記述には、授業中に捉えられた児童の姿の詳細度や観察視点にばらつきがあり、質的データとしての精度に差があることも明らかとなった。控えめな児童の成長や、思考が行動に表れにくい児童の変容は観察だけでは拾いきれないという課題も共有された。今後は、観点の共通化や記録方法の工夫により、直接評価としての信頼性をさらに高めていく必要がある。

（２）取組２「My project（質的改善を図るべき校務分掌上の課題）」について

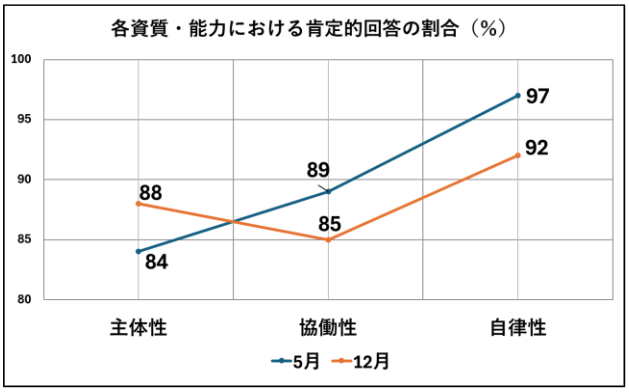
ア　学習者による自分の学びについての記述より（タイプⅠ　間接×質的）

○各教職員の「研究のまとめ」を横断的に分析すると、校務分掌の改善によって、児童の振り返りの質の変容が多く報告された。特に、委員会活動・行事・学年経営など、授業外の学びにおいて、児童が「自分たちで協力して進められた」「次はこうしたいと思った」「役割の意味を考えるようになった」等、主体性・協働性・自律性といった資質・能力に関わる記述が増えていることが明らかとなった。

●一部のまとめには、取り組んだ工夫の報告はあるものの、児童の振り返りからどの資質・能力の成長が読み取れたのかが十分に記述されていない例も見られた。特に、児童の記述を「行動の変化」として捉える段階で止まり、「どの資質・能力の育成につながったのか」まで踏み込めていないものもあった。今後は、校務改善によって児童の学びがどのように深まり、どの力が育まれたのかを、振り返り記述の質的分析と結び付けて記述できるような共通の視点づくりが必要である。

イ　児童アンケート結果より（タイプⅡ　間接×量的）【資料 34】

○「主体性」（+4）の向上には、各分掌で取り組んだMy projectが、児童に自ら活動の目的を捉えて動く経験を多面的に保障したことが大きく影響している。これにより、活動や学習の場面で見通しをもち、自分から役割を果たそうとする姿が増え、主体性の向上につながったと考えられる。



【資料 34　各資質・能力における肯定的回答の割合（%）】

○「自律性」（-5）はやや減少したものの、依然として最も高い水準を維持した。My

projectの取組を通して、「最後まで粘り強く課題に向き合う」「自分の役割に責任をもって取り組む」経験を継続的に保証したことが要因と考えられる。

●「協働性」(-4) の低下については、多くの教師が委員会活動を My project として進める中で、各委員会で児童が協働できる手立てや活動の進め方を十分に共有できなかったことが要因と考えられる。委員会活動における協働を生む仕組みや手立てを教職員間で共有できていれば、児童同士が役割を調整し合う機会が増え、数値も向上した可能性がある。

ウ　パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等より（タイプⅣ 直接×質的）

○教職員の「研究のまとめ」を横断的に分析すると、４月当初と比べて児童の主体的な行動や協働的な関わりに明確な変容が見られた。例えば、委員会活動では、当初は一部の６年生が中心となって議論や活動を進めていたが、計画の事前共有や役割の明確化を進めたことで、６年生全体が目的意識をもって動く姿が生まれ、さらにその姿が下学年にも波及し、５年生が「言われたことをする」段階から自ら行動を選び取る段階へと移行していた。また、人権、環境、特別活動、地域学習などの領域においても、教師の観察記録には、自分の意見を理由とともに説明しようとする姿、友達の考えを踏まえて発言を発展させる姿、活動の目的を理解した上で役割を自ら選び取る姿、委員会・集会の準備を「仲間と相談しながら改善する」姿など、身に付けさせたい資質・能力を働かせながら動く児童の姿が直接的に記述され明らかに増加していた。

●主体性・協働性・自律性のさらなる向上に向けては、依然として克服すべき点が残る。主体性については、自ら進んで行動する場面が増える一方で、活動の目的理解が不十分な児童は行動が形式的になりがちであった。また協働性については、助け合いの姿は広がっているものの、意見を深めたり結論に向けて整理したりする対話の質にはばらつきがあり、議論が停滞することもあった。さらに自律性の面では、見通しをもって粘り強く取り組む児童が増えてきたものの、難易度の高い場面では教師の助けを待ってしまう児童もおり、「自分で考え、自分でやり切る」段階には届かない姿も見られた。これらを踏まえると、児童一人一人が活動の意義をより深く理解し、仲間と学び合いながら、自らの力で粘り強く課題解決に向かう力を継続的に育む環境づくりが今後の課題となる。

【参考・引用文献一覧】
・文部科学省（2018）『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)』　東洋館出版社
・文部科学省（2021）『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」
・大分県教育センター（平成 26 年 3 月）「『一層やりがいのある校内研究』手引書」
・前田康弘（2024）「まんがで知るデジタルの学び３ 授業改善プロジェクト」　さくら社
・田中博史・河内麻衣子（2022）「学校が変われば、授業が変わる！新しい研究授業の進め方」　東洋館出版社
・葛原順也・花岡隼佑（2024）「ごく普通の公立小学校が、校内研究の常識を変えてみた」　明治図書出版株式会社
・授業づくりネットワーク編集委員会（2025）「多様性を活かす校内研修」学事出版株式会社
・古舘良純（2024）「研究主任のマインドセット」　明治図書出版株式会社
・溝上慎一（2024）「学校教育目標のアセスメントとカリキュラム・マネジメントの組織化に向けて」　東信堂

研究同人

【令和６年度】

校　　長	渕上　竜一
教　　頭	井上　博士
１年１組担任	池田　若菜
２年１組担任	伊藤　寛子
３年１組担任	渡邊　亮太
４年１組担任	中村　界斗
５年１組担任	平島　勇太
５年２組担任	徳永　朝美
６年１組担任	吉田　有伶
さくら担任	坂本　恭兵
なでしこ担任	清水　麗
たんぽぽ担任	村上　正順
養護教諭	上野　緩実
理科専科	北村　栄敏
算数専科	山本　和明
事務主査	吉岡　三紀子
特別支援教育支援員	髙尾　敦子
特別支援教育支援員	木下　秀憲
特別支援教育支援員	野口　順子
特別支援教育支援員	宮本　明子
特別支援教育支援員	菊川　徳子
学校図書司書	齋藤　百合子
学校用務員	武智　登美枝
学校用務員	江崎　照幸
教員業務支援員	大石　裕子

【令和７年度】

校　　長	渕上　竜一
教　　頭	井上　博士
１年１組担任	吉田　有伶
２年１組担任	渡邊　亮太
３年１組担任	坂本　恭兵
４年１組担任	徳永　朝美
５年１組担任	中村　界斗
６年１組担任	平島　勇太
６年２組担任	守屋　数人
さくら担任	道喜　亜香里
なでしこ担任	清水　麗　・　菊池　美花
たんぽぽ担任	村上　正順
養護教諭	上野　緩実
理科専科	福嶌　英史
事務主査	吉岡　三紀子
特別支援教育支援員	髙尾　敦子
特別支援教育支援員	木下　秀憲
特別支援教育支援員	野口　順子
特別支援教育支援員	宮本　明子
特別支援教育支援員	菊川　徳子
学校図書司書	齋藤　百合子
学校用務員	武智　登美枝
学校用務員	江崎　照幸
教員業務支援員	大石　裕子